平成２８年１２月６日

さいたま地方裁判所　御中

再審請求人　八木茂

再審請求書

 　　弁護人　　高野隆

 　　弁護人　　松山馨

 　　弁護人　　井桁大介

 　　弁護人　　趙誠峰

 　　弁護人　　畑井研吾

　　　　　　　　　　　　 弁護人　　山下瑞木

　　　　　　　　　　　　 弁護人　　古橋将

　上記請求人に対する殺人、殺人未遂、詐欺、傷害、公正証書原本不実記載・同行使被告事件について、平成14年10月1日さいたま地方裁判所が言い渡した死刑の確定判決に対し、以下のとおり無罪を言い渡すべき明らかな証拠をあらたに発見したので、刑事訴訟法第435条6号にもとづき再審の請求をする。

＜再審請求書目次＞

[Ⅰ　本再審請求（第二次再審請求）に至る経緯 - 4 -](#_Toc468748566)

[１．本庄事件とは - 4 -](#_Toc468748567)

[２．第一審での死刑判決 - 22 -](#_Toc468748568)

[３．控訴棄却判決 - 23 -](#_Toc468748569)

[４．上告棄却判決 - 23 -](#_Toc468748570)

[５．第一次再審請求 - 23 -](#_Toc468748571)

[６．即時抗告棄却決定 - 24 -](#_Toc468748572)

[７．特別抗告棄却決定 - 24 -](#_Toc468748573)

[Ⅱ　新証拠 - 26 -](#_Toc468748574)

[Ⅲ　逸見意見書（証拠番号１） - 27 -](#_Toc468748575)

[１　風邪薬事件についての確定第一審判決の認定事実とその証拠 - 27 -](#_Toc468748576)

[２　逸見明博教授の鑑定意見書（証拠番号１） - 28 -](#_Toc468748577)

[Ⅳ　A鑑定（証拠番号２，３，４，５） - 36 -](#_Toc468748578)

[１　A鑑定書及びA意見書に共通する前提事情 - 36 -](#_Toc468748579)

[２　A鑑定書の内容 - 40 -](#_Toc468748580)

[３　A鑑定書は無罪を言い渡すべき明らかな証拠である - 43 -](#_Toc468748581)

[４　A意見書の内容 - 44 -](#_Toc468748582)

[５　A意見書は無罪を言い渡すべき明らかな証拠である - 49 -](#_Toc468748583)

[Ⅴ　アナリエ供述調書など（証拠番号６，７） - 51 -](#_Toc468748584)

[１　確定第一審判決の認定 - 51 -](#_Toc468748585)

[２．アナリエの新供述の内容 - 53 -](#_Toc468748586)

[３．新規性および明白性 - 60 -](#_Toc468748587)

[Ⅵ　おわりに - 61 -](#_Toc468748588)

Ⅰ　本再審請求（第二次再審請求）に至る経緯

# １．本庄事件とは

## (1) 端緒

平成11年5月29日未明，元パチンコ店店員森田昭（旧姓関，当61歳）が埼玉県本庄市内のアパートで亡くなった。その翌日未明，元塗装工川村富士美（当39歳）がパジャマ姿のまま，「追われている」などと意味不明のことをつぶやきながら市内の病院を訪れた。病院は真夜中の不審者の来訪を警察に通報した。駆け付けた警察官は彼を警察署に連れて行った。

森田昭も川村富士美も市内で金融業「国友商事」を営む八木茂（請求人。以下，「八木」ともいう。）の知人であり，八木が昔からやっているカラオケパブ「マネキン」（平成7年までは「レオ」と呼ばれていた）の常連客であった。さらに森田昭の妻考子はレオの元ホステス，川村の妻「美穂」ことアナリエ・サトウ・カワムラはマネキンのママであった。それだけではない。彼女たちはいずれも八木茂の愛人であり，森田昭と川村には「妻」を受取人とする合計31口，死亡保険金10億円余りの生命保険がかけられていた。

川村を保護した本庄警察は119番通報した。やってきた救急車には警察官も同乗した。そして疾走する救急車のなかで，警察官は川村に質問をし続けた。

薬を飲まされたのは，誰に飲まされたの。

――その女の子だけどその社長から貰って。

何て言う女の子なの。

――タケマユミ。

それはどういう薬なの。

――酢の錠剤だ。

保険入ったんか。

――入りました。

無理矢理か。いやいや……。

――借金があるから。

誰に借金があるの。

――八木。

（本庄警察作成のテープ反訳書）

川村に「酢の錠剤」を飲ませたという「タケマユミ」とは，八木茂のもう１人の愛人｢マミ｣こと武まゆみである。彼女もレオのホステスであった。最近は昼間は国友商事の事務員として働き，夜はその隣で「小料理マミー」（平成8年までは「赤ちょうちん」）を経営している。

川村の搬送先である深谷赤十字病院の当直医師は，「薬物中毒の疑い」があるとして胃洗浄などの措置を施したが，入院の必要はないと判断した。しかし警察は川村を入院させるように病院に依頼し，病院はこれを受け入れた。さらに警察は，病院に川村と八木茂やその愛人たち――武まゆみ，森田考子，アナリエ・サトウ・カワムラ――とを面会させないように釘を刺した。そしてこの日のうちに，武の自宅と彼女が経営する「小料理マミー」店内，アナリエが経営するパブ「マネキン」を捜索し，森田昭の遺体を葬儀屋から押収した。容疑は「被疑者不祥に対する殺人・殺人未遂」であった。

## (2) 平成11年の取調べ

本庄警察は，その翌日5月31日から早速武まゆみ，森田考子，アナリエを連日警察に出頭させて，取調べを行った。

この取調べの期間中ひとり森田考子は他のメンバーとの連絡を絶った。考子は早くも取調べ初日の5月31日に，森田昭との結婚が保険金を受け取るための偽装結婚であり，栄養剤と偽って薬を酒に混ぜて飲ませて殺そうという｢殺人計画｣に基づいて4人で森田を殺したという自白をした。その後6月22日まで彼女は毎日取り調べられ，合計17通もの自白調書をとられている。しかし考子の自白の内容は甚だ漠然としている。

＊＊＊関さんに対して，いつ殺すための薬等を飲ませていたのかは知りませんが，パパ[八木]に言われて，小料理マミーのママ武まゆみ，パブママネキンのママ美穂[アナリエ]の2人が，薬と称する毒を関さんに飲ましていたはずです。（平成11年5月31日付警察官調書）

川村富士美についても，考子は保険金殺人の「第2のターゲット」だったと供述した。しかしその「自白」も同じような漠然としたものだった。

武まゆみは殺人容疑を全面的に否認し続けた。アナリエも川村との偽装結婚を否定し，「殺人」につながるような話しは何もしなかった。警察がこの段階で彼女たちを逮捕することはなかった。

## (3) 「保険金殺人疑惑」

7月になるとマスコミは「埼玉保険金殺人疑惑」をいっせいに報道した。森田昭の遺体は埼玉医科大学法医学教室主任教授齋藤一之によって司法解剖され，死因は「高度の低栄養状態に伴う化膿性胸膜炎・肺炎」とされた。しかしマスコミは「司法解剖の結果，薬物中毒の疑いがあることが分かった」などと書いた（週刊現代99年7月31日号，週刊朝日99年7月30日号）。川村は深夜にパジャマ姿のまま「追われている」などと意味不明の言葉をつぶやきながら病院に駆け込み，その後に採取された彼の尿からは覚せい剤が検出された。彼の「症状」は明らかに覚せい剤によるものであった。川村の意識は勿論しっかりしており，搬送された深谷赤十字病院の当直医は入院の必要はないと判断している。しかしマスコミは川村が「意識不明の重体」に陥っていたと報じた（週刊現代・前掲，サンデー毎日99年8月1日号）。前年に発生した「和歌山毒カレー事件」と「非常に良く似ている」「第2の和歌山カレー事件か」などという論評が新聞，雑誌，テレビを通じて繰り返された。

この事件の4年前平成7年6月に，やはり八木の知人でレオの客であった佐藤修一(当45歳)の死体が利根川の導水路で発見され，自殺として処理された。佐藤の妻であったアナリエに約3億円の生命保険金が支払われていた。マスコミはこれを「疑惑の原点」だとした（週刊ポスト99年8月13日号）。佐藤と森田だけではなく八木の周辺には「不審死」を遂げた人が5人もいるなどと書いた雑誌もあった（サンデー毎日・前掲）。そして，おとなしく人の良さそうな人物をスナックでツケで飲ませ，借金を膨らませたうえ，「人間養豚場」と呼ばれる劣悪な「寮」に住まわせて，連日アルコール漬けにしてじわじわと体を弱らせていくなどとその「手口」をまことしやかに紹介した（週刊現代・前掲，サンデー毎日・前掲，週刊ポスト・前掲）。

国友商事やマネキンの周辺には新聞・雑誌記者やテレビのレポーターそして野次馬が押しかけ，大混乱となった。記者の中には，八木の知人宅を回って「青酸カリを渡されなかったか」などと訊いて回る者や，警察の先回りをして県内の薬局の「聞き込み」をする者もいた。八木たちはマネキンやマミーで釈明のための記者会見を繰り返し開いたが，記者から料金を徴収する彼らをマスコミは「厚かましい」と非難した（週刊現代・前掲）。他方で，彼らは大金を使って八木と彼の愛人たちを自動車の送り迎えつきで都内の高級ホテルに宿泊させて「独占インタビュー」をしたりしている。

## (4) 「酢の薬」の正体

マスコミが大騒ぎを始めたころ，警察は「酢の薬」の正体を突き止める捜査を始めたようである。本庄警察は5月30日から31日にかけて，武まゆみの自宅や彼女が経営する小料理マミーそして彼女の自動車の中から様々な医薬品や健康食品を押収した。6月下旬以降これらの成分についての鑑定依頼を繰り返した。また，押収した森田の死体から摘出された臓器や血液，川村の吐しゃ物や血液，胃内容物などを鑑定に出している。本庄警察は全国の医薬の専門家数十人に合計116件の鑑定依頼を出した（埼玉新聞2000年4月17日）。

川村は，マミー店内で武まゆみから「酢の錠剤」とか「栄養剤」と言われて大小2種類の白い錠剤――大きい方を６錠ぐらい，小さい方を20錠ぐらい――を毎日のように飲まされていたと供述した。そして，最近は飲むと10分くらいで吐き気を催し，マミーのトイレなどで吐いていたという。警察は川村がペンキ塗りのアルバイトをしていた八木の弟の家の敷地から干からびた吐しゃ物と思われるものを押収した。その中には白い錠剤が付着したものがあった。科学捜査研究所（科捜研）にその鑑定を依頼したところ，風邪薬の成分――イソプロピルアンチピリン，アセトアミノフェンなど――が含まれているとの報告を受けた（平成11年7月7日付科捜研の回答書）。

そのころから警察は，マミーや武の自宅などから押収した薬品の成分についての鑑定を科捜研に依頼したが，科捜研からの中間回答が来るのは年が明けてからである。平成12年1月19日付で，マミーや武の自動車から押収した「つかれず」の容器に入っている錠剤の成分は「新ルルーA錠（三共）に類似している」との回答が来た。これとあい前後して，森田や川村の末梢血液や毛髪などから新ルル－A錠の主成分であるアセトアミノフェンが検出されたとの回答が届いた。

このような科学捜査と並行して警察は，本庄市内及びその周辺の薬局薬店関係者に対する聞き込み捜査を実施した。平成11年9月下旬には，本庄市に近い花園町にある薬局の店長が，最近「保険金殺人疑惑の中心人物」とマスコミに騒がれている男がプレコール持続性錠や新ルルA錠を何箱も買って行ったと話した。それに続いてマネキンやマミーから歩いて数分の距離にある薬局の店長も同じような話しをした。こうして「酢の薬」の正体は市販の総合感冒薬に絞られていった。

風邪薬や頭痛薬に配合されている解熱鎮痛剤アセトアミノフェンは，比較的に安全な薬とされている。しかし大量に服用すると肝障害が起こり，死に至ることが知られている。医学文献によると，1日の推奨量は4ｇ以下，中毒量（肝障害を引き起こす量）は６ｇ以上，致死量（劇症肝炎になって死亡する）は13～15ｇとされている。三共の新ルルＡ錠には1錠中に100mgのアセトアミノフェンが含まれている。したがって，肝障害を起こすためには1度に60錠以上，劇症肝炎を起こして死亡させるためには130錠以上を飲ませなければならない。川村が供述する程度の量では肝障害を起こすことも無理である。森田昭の解剖所見によると，彼の肝障害の程度は軽いものであり，死因になりうるようなものではなかった。彼の死因は「化膿性胸膜炎・肺炎」である。入院中の血液検査の結果を見ても，川村の肝機能の数値は正常範囲を少し上回る程度にすぎない。それ以上に悪い数値で毎日普通に仕事をこなしている人はたくさんいる。

## (5) 好中球減少症

アセトアミノフェンと胸膜炎・肺炎とをどう結びつけるか。捜査の焦点はそこに絞られていった。平成12年1月中旬以降警察はこの問題について全国の医学薬学の専門家に相談した。そして同年2月から3月にかけて，アセトアミノフェンと胸膜炎・肺炎とを結びつける専門家の回答が本庄警察に次々に寄せられた。

森田昭の死体を解剖した齋藤一之によると，森田昭は「低栄養状態に伴って抵抗力が減退し，その過程で日和見感染的に胸膜炎・肺炎などを起こして死亡したとみるのが医学的には自然であろう」ということであった（齋藤平成12年3月17日付鑑定書）。つまり森田昭は栄養状態が非常に悪くそのために抵抗力（免疫力）が落ちていた。その結果，健康な人では問題にならない細菌に感染して胸膜炎・肺炎を起こし，死亡したというのである。人の免疫にはさまざまな仕組みがある。それに関わる細胞もさまざまである。齋藤は森田昭の免疫力の低下がどのような仕組みで生じたのかについては何も説明していない。

しかし警察は「好中球減少」に的を絞った。なぜならそれ以外にアセトアミノフェンと森田昭の死とを結びつけるものはないと考えてしまったからである。アセトアミノフェンの添付文書によると「その他の副作用」の欄に「0.1％未満」の頻度で「顆粒球減少」が起こることが記載されている。顆粒球とは白血球を構成する5つの分画のうち好中球，好酸球，好塩基球を総称する名前であり，その大部分を占めるのが好中球である。東京大学医学系大学院助教授北村聖は，川村富士美の血液検査のデータに基づいて，白血球の数が基準値の範囲内ではあるが，減少しており，「白血球中の最大の分画である好中球の減少が影響を及ぼしているものと見られ，薬物性と推定される」と回答した（北村平成12年3月6日付回答書）。さらに北村は，森田昭の解剖所見や毛髪鑑定の結果を検討して，「好中球減少のほかに，抵抗力低下の原因として推定する要素は特に認められ[ない]」と回答した（北村平成12年3月10日付回答書）。続いて，東京薬学情報研究所所長福室憲治は，中毒量に至らない量でも常用量を超えた量を長期間服用したり，アルコールと併用したりすれば，副作用である好中球減少が起こる危険性は高まると考えると回答した（福室平成12年3月19日付回答書）。

こうして，本庄警察は「科学捜査」の結果，八木茂らは森田昭に長期間にわたってアセトアミノフェンを含有する総合感冒薬を多量に飲ませたうえ，毎日のようにアルコールを飲ませて，彼の血液中の好中球を減少させてその免疫力を低下させ，胸膜炎・肺炎に罹らせて殺したというストーリーにこぎ着けたのである。

## (6) 逮捕

平成12年3月24日本庄警察は八木茂，武まゆみ，森田考子，アナリエ・サトウ・カワムラの4名を2件の偽装結婚（公正証書原本不実記載・同行使）の容疑で逮捕した。これを皮切りに川村富士美殺人未遂事件，そして森田昭殺人事件の順で逮捕，勾留，起訴を繰り返していった。こうして森田昭殺人事件が起訴される5月30日までの66日間，4人は土曜も日曜も祭日も休むことなく，毎日朝から晩まで，ときには深夜を超える時間帯まで警察官と検察官の取調べを受け続けた。

森田考子は逮捕の初日こそ「偽装結婚をしたとは思っていません」と言って争ったが，2日目以降はすべての容疑を認める供述をし続けた。しかし，前年の自白と同じように彼女は殺人の中身について具体的な供述は何もできなかった。「私は，関さんを毎日マミーに行かせる以上，薬を飲ませるのはマミーの店内なのだろうと思っていました。私は，マミーで薬を飲ませるのであれば，飲ませるのはまゆみの役目だろうと何となく思いました」（考子平成12年5月22日付検察官調書）。こんな感じである。森田考子はその「薬」が何であるかも供述できなかった。

アナリエは逮捕3日目から川村との偽装結婚を自白したが，殺人事件については「身に覚えがない」「誰からも指示されたり，相談されたこともありません」と言い続けていた。しかし，逮捕から1ヶ月ほど経過した頃から「八木の指示で川村富士美と森田昭にお酒を沢山飲ませていた」と話し始めた（アナリエ平成12年4月17日付上申書）。しかし「薬」については知らないと言い続けた。5月中旬ころの調書に「私は，いくら毎晩強いお酒を飲ませているといっても，そう簡単にすぐ具合が悪くなるのもおかしいので，八木さんか武まゆみさんか森田考子さんが，何かお酒を飲ませる以外にタゴさん［森田昭］を殺すための方法を実行しているかもしれないと考えるようになりました」という供述が登場する（アナリエ平成12年5月13日付検察官調書）。アナリエが「薬」に関する供述を初めてしたのは，逮捕からちょうど2ヶ月たった5月24日である。平成11年2月半ばころ川村から，武に「酢の薬」をもらっているという話を聞いて，武が川村に体に良い薬をやるわけはないから，武は川村と森田に「酢の薬」と嘘を言って毎晩体に悪い薬を飲ませていることが判ったという（アナリエ平成12年5月24日付警察官調書）。しかしアナリエはこの「体に悪い薬」についてこれ以上の話をできなかった。それでも彼女は，川村殺人未遂事件についても森田殺人事件についても，自分が「共犯者」であることを認めた。

## (7) 武まゆみの自白

武まゆみは逮捕から1ヶ月過ぎても全ての容疑を否定していた。しかし取調べ検事が替わったことで武の供述態度は一変する。4月23日武の担当は内藤晋太郎検事から佐久間佳枝検事に替わった。佐久間は森田考子の取調べ担当だったが，この日から武の取調べもするようになった。

佐久間は武に向かって，

既に4人を有罪にする証拠は充分揃っている；

考子もアナリエも自白した；

否認しているのは武と八木だけであり，このまま裁判を続けると2人は確実に死刑になる；

死刑を免れるには自白する以外にはない；

と繰り返し告げて，自白を求めた。

＊＊＊八木を死から救えるのはあなたしかいない｡ツヤ子さん[八木の前妻]でも，田辺さん[同棲中の愛人]でもない。あなただけ｡森田考子やアナリエでもない。あなたの自白だけが八木を助けられる｡＊＊＊八木を助けてあげようよ｡八木もかなり自分の不利なこともみとめてるよ。だけどあなたのことを何も言わないんだ｡あなたが話せば，私が八木に伝えるよ｡あなたの気持ちを｡八木に助かってほしいと｡＊＊＊調書がなくて無罪になった人はいない｡殺人だよ｡起訴されて無罪になった人もいない｡あなたがこのままだまっていても，裁判所は認定する（起訴どおりに）｡そうすると，八木は自分の女をつかってやったということで，死刑はまぬがれない。それでいいのか？＊＊＊八木もあなたたちのことは心配してると思うよ｡楽にしてあげようよ。＊＊＊もうあまり時間がない｡私の言ってることが，信じられない？このままいけば，八木はまちがいなく死刑だ｡あなたも同じだということ，あなたが話せば二人とも助かるかもしれないということ｡もしこれが嘘だったら私検事やめるよ。(武の日記から)

佐久間検事の取調べが始まって4日目，4月26日に武はマミー店内で森田と川村に新ルルAやプレコールを「酢の薬」と偽って与えていたことを認めた。しかしその後も，武は殺すつもりはなかったとか，森田は風邪薬が原因で死んだとは思っていないと，殺人を否認する話をしていた時期もあった。しかし，すぐに佐久間検事の説得に応じて，否認を撤回し全面的な自供を続けた。

こうして平成12年5月30日までに，2件の偽装結婚事件と川村殺人未遂事件，森田殺人事件の起訴は完了し，捜査は一段落した。八木は66日間の調べの間一貫して殺人を否定し続けた。

## (8) 自殺とトリカブト

捜査官は5年前に亡くなった佐藤修一のことについても4人を厳しく追及した。しかし，川村と森田に対する殺人事件（「風邪薬事件」）を自白した愛人たちからも，佐藤の殺人が立件できそうな供述は何も得られなかった。アナリエは，佐藤との結婚（平成2年11月）は配偶者ビザをもらうための偽装結婚だったと告白し，佐藤が亡くなったとき八木から保険金として350万円しかもらわず，実際の保険金の額がいくらなのかはわからなかったと述べた。森田考子は，佐藤が亡くなったとき八木から現金で150万円もらったが，そのころから佐藤は殺されたのではないかと疑っていたという。

＊＊＊その時から八木や武まゆみは佐藤修一さんを何らかの形で殺しておいて保険金を騙し取ったのではないかと内心疑っていたので，関さんを殺して保険金を騙し取るという八木の本心を察したとき，自分なりに「やっぱり八木は保険金殺人をしていたんだ。関さんも同じように殺すんだ」とそれまでの疑いが晴れたとというか，妙に納得できた気持ちになりました。（森田考子平成12年3月29日付検察官調書）

このような漠然と殺人を匂わせる思わせぶりな供述は武まゆみの検察官調書にも見られる。森田殺人事件の起訴の前日に作成された武の検察官調書によれば，彼女は八木から森田昭の保険金の話をされたとき，

佐藤さんのときと似ていると思い，人が都合よく死ぬということは2回も続かないと思ったことから「関さんはいずれ殺される」と思ったのです｡もっとも，私は，自分が実際に関さんの殺人や川村さんの殺人未遂に加わってみて，今にして思えば，佐藤さんは八木さんが殺したのかも知れないと思っています｡（武平成12年5月29日付検察官調書）

というのである。森田考子の調書も武の調書も，風邪薬事件について武を自白させた佐久間佳枝検事の手になるものであり，内容はよく似ている。しかし，いずれにしても，このような供述で殺人事件を立件するのは不可能である。

早くからマスコミに「疑惑の原点」と指摘され，捜査の最終目標をそこに定めていたと思われる佐藤修一の事件はこうして壁に突き当たった。捜査幹部も「立件は難しい」と記者に漏らしていたようである（埼玉新聞2000年5月31日；毎日新聞同日付）。1件の殺人と1件の殺人未遂では「極刑に届かず」，八木の「悪運はどこまで続くのか」と不満を漏らす雑誌記事もあった（週刊新潮2000年4月20日号）。

しかし6月下旬捜査は新たな展開を迎える。

6月20日，武は佐藤の入水自殺に自分が直接関わっていたことを告白した。八木が佐藤に「自殺したことにして保険金を騙し取ろう」という計画をもちかけ，佐藤もその気になった；平成7年6月3日の夜に自分が佐藤を車で坂東大橋付近まで送った；その後佐藤は水死体で発見された，というのである。そしてさらに，武は衝撃的な話をした。6月30日，彼女はこの「偽装自殺」が行われる前年まで約2年間にわたって，八木の指示で佐藤にトリカブトの根っこを刻んだものを饅頭やあんパンに仕込んで佐藤に食べさせていた，と供述したのである。

本庄警察はこの二つの話のうちトリカブトの話に飛び付いた。武の供述の裏づけをとるために，八ヶ岳山麓の美濃戸別荘地に捜査員を派遣してトリカブトの自生を確認し，埼玉医科大学法医学教室にホルマリン漬けで保存されていた佐藤の臓器を取り寄せて，トリカブトの成分があるかどうか鑑定を依頼した。しかし，それとともに警察は，溺死の可能性も検討するために，佐藤の臓器に利根川のプランクトンが含まれているかどうかについても鑑定依頼した。

このころから捜査官は3人の女性を対する連日連夜の取調べを再開した。武の話は，トリカブトを少しずつ与えていたが，最終的には佐藤は自ら利根川に飛び込んで溺死したというものである。けれども警察はこの最後の部分を決して受け入れなかった。「佐藤は１人では歩けない状態だった」「誰かが突き落としたんだろう」と言って武を追及した。しかし武は「自殺」の話は本当だと言って聞かず，警察に「私は嘘をついていません」という上申書を出したりして抵抗し続けた。

8月13日，佐藤の臓器から微量のトリカブト成分が検出されたという科捜研の中間報告が届いた。そしてその3日後には，今度は佐藤の腎臓と肺から利根川に生息するプランクトンが検出されたとの回答も届いた。いずれの鑑定結果も武の話を裏付ける。腎臓からプランクトンが出たということは，直接の死因が溺死であることを裏付けるのである。しかし，このプランクトン検査の結果について，警察は，腎臓が他の臓器と一緒にホルマリン漬けにされていたために汚染されたもので，溺死の裏付けにはならないと断定した。そして「トリカブト殺人」の可能性をさらに追及することにした。しかし武は「嘘はついていない」と言い張り，佐藤は利根川に飛び込んで死んだ，自分が車に乗せて行ったのだから間違いないと言い続けた。結局本庄警察はこれ以上武を追及してもトリカブト殺人の自白を得ることは難しいと判断して，9月25日から28日にかけてそれまでの武の供述を調書にまとめて，取調べを一応打ち切ることにした。

## (9) 森田考子の記憶回復

武と警察との間でこのようなやり取りが続いている間に，森田考子が佐藤修一についてさまざまな出来事を「思い出した」と言いはじめた。彼女は思い出したエピソードを次々に「上申書」を書いた。警察官と検察官はその内容をまとめて調書にしていった。8月1日から10月23日までの間に上申書20通，警察官調書9通，検察官調書2通が作られた。その内容はこんな感じである。

平成7年6月1日の朝方に，東秩父にある八木の別荘に八木，武，アナリエ，自分の4人で行った；別荘で八木と武は「佐藤さんも饅頭に飽きているので，パンのほうがいい」「私が渡せば佐藤さんは食べるよ」「あとはマミちゃんに任せるから」という会話をしていた；以前2人が「植物のクキか根っこ」を入れた饅頭を佐藤に食べさせたと言うのを聞いたことがあるので，この別荘での八木と武の話しはパンにこれと同じ毒を入れて殺すのだと分かった；八木は「利根川の土手に行くにはどうやって行けばいいんだっけ」と聞いてきた（平成12年8月1日付上申書）。

平成7年6月3日の夜レオで八木が「佐藤さんの様子を見に行ったら，部屋の中が想像がつかないほど暴れてもがいて死んでいたよ」と言っていた（同日付の別の上申書）。

武が「パンにはさんだ」とか「パンに混ぜて入れた」と言うのを聞いた（8月9日付上申書）。

いつの日かはっきりしないが武が「モップを持っていって良かったね。それでつついて流したけど，雨がまた降れば流れるだろう」と言っていた（同日付の別の上申書）。

いつのことかわからないが，八木が「まみはすげえ力だよな。1人で担いじゃうんだからな」と武が佐藤修一の死体を1人で運んだという意味の話をしていた（同日付のさらに別の上申書）。

佐藤の遺体が発見された平成7年6月ころの話，八木と武，アナリエが，佐藤の靴の紐やズボンのボタンの話をしていた（8月18日付上申書）。

このように，森田考子の話は，八木と武，アナリエの会話の断片を聞いたというエピソードを中心に順不同に語るものであるが，その話はある一定の方向をかなり明確に指し示している――平成7年6月1日に八木の別荘で佐藤をトリカブトで殺害する謀議をして，この謀議に基づいて武まゆみがその2日後の6月3日にトリカブト入りのパンを佐藤に食べさせて殺害し，その日の夜に佐藤の死体に衣服を着せて，それを自殺に見せかけるために利根川に流した，というストーリーである。

## (10) 武まゆみの記憶回復

佐久間佳枝検事は平成12年10月22日と23日の2日間かけて森田考子の話を調書にまとめた。そして，その翌日武まゆみを取り調べることにした。佐久間と武はおよそ5ヶ月ぶりに再会した。佐久間は，考子の供述を要約して，平成7年6月3日に，武らが佐藤にトリカブト入りのパンを食べさせて殺害し，その死体を利根川に流したことは「科学捜査の結果」間違いないことである，と告げた。そして，このまま否認を続けると武も「八木と同じ」になる，すなわち死刑になると言った。佐久間は武に尋ねた。

「生きている佐藤さんに最後に食べさせたものは，何？」

武は佐久間の前で目を閉じて1時間近くも考えていたと言う。

＊＊＊すると，頭の中にパッとあんパンの絵が浮かびました。そのあんパンは，ビニール袋に入った比較的薄い感じの安っぽいあんパンでした。＊＊＊私が佐藤さんにトリカブト入りのあんパンを最後に食べさせたことを一気に思い出しました。私は，目を開けて，検事さんに

「最後に食べさせたのはあんパンです」

と答えました。検事さんは

「それはいつのこと」

と言いました。私はディナーショーの日だと思い出しました。

（武平成12年11月7日付検察官調書）

平成7年6月3日渡辺荘で「いつもの2倍」の量のトリカブトを入れたあんパンを佐藤に食べさせたことを武は「思い出した」。しかしその前後の出来事を思い出すことはできなかった。「その辺の前後の記憶だけが，スッポリとなくなっている」――武は日記にそう書いている。しかし，この日以降連日繰り返された佐久間検事の取調べの間に，武は事件の詳細を次々に語るようになった。11月中には，八木が佐藤をトリカブトで一気に殺す計画を立てたいきさつから，6月1日別荘に4人が集まり殺害計画の謀議をしたこと，そして6月3日佐藤にトリカブト入りのあんパンを食べさせて殺害し，その日の夜に佐藤の死体に革ジャンなどを着せて，それを利根川に捨てたという一連の行動に関する詳細な供述を完成させた。平成12年12月12日（渡辺荘事件の起訴の前日）の日記に武はこう書いている。

私は，自分で記憶にふたをしてしまう程の嫌な，そして，とても悪い事をしていた｡今，その記憶のふたをあけて，よみがえらせる事ができて，本当に良かった｡それもこれも，みんな佐久間検事のおかけだ｡＊＊＊私は，忘れていた事を思い出させてもらって，とてもさっぱりして，すがすがしい気持ちになれた｡ありがとうございます｡

## (11) アナリエの供述

アナリエは平成12年11月16日から渡辺荘事件の自白を始めた。それまでの供述は「嘘」であり，刑事から「聖也［ひとり息子］に恥ずかしくないのか」と説得されて，本当のことを言う決心がついたという。アナリエの自白は武の自白を追いかけるように徐々に詳細なものになっていった。しかし，武があんパンの中に仕込んだものについては「毒」という以上の供述はできなかった。

## (12) 一審公判

平成13年3月30日さいたま地裁301号法廷で第1回公判が開かれた。3人の女性は全ての訴因について有罪を認めた。八木茂は1人全面的に否認した。

私は，佐藤修一さんの遺体は見たこともないし，触れたこともありません。武まゆみさん，アナリエさん，森田考子さんも，佐藤修一さんの遺体は見てないですし，触れたこともないのです。ですから殺害現場とされている渡辺荘では殺害はなかったのです。

真実は，平成7年6月3日午後8時30分から9時15分にかけて，武まゆみさんが佐藤修一さんを車で渡辺荘から坂東大橋たもとの土手まで運び，そこに佐藤修一さんを降ろしています。この後，佐藤修一さんは，利根川の本流真上の坂東大橋の歩道から飛び込み自殺をしたのだと思います。

＊＊＊

関昭さんの殺人事件については，殺害をする気持ちもありませんし，殺害をする行為をとったこともありません。共犯とされる3名の女性に，関昭さんを薬と酒を飲ませて殺すように指示命令したことはありません。関昭さんに毎日マネキンに行くように指示命令をしたことも1度もありません。

薬を買ってきてくれと頼まれ，関昭さん宅に痛み止めと風邪薬は５～6回もって行ったことはあり，1回に４～5箱で，8箱を1回で持って行ったこともあります。関昭さんは，痛み止めの代わりに覚せい剤をストローで吸引していたので，肺を悪くして病気になって死亡したと思っています。

川村富士美さんの殺人未遂事件については，殺害をする行為をとったことはありませんし，殺意をもったことはありません。共犯とされる3名の女性に川村さんを，薬と酒を飲ませて殺すように指示命令をしたことはありません。（八木第1回公判意見陳述）

八木の公判は愛人たちのそれと分離され，さいたま地裁第2刑事部（裁判長若原正樹，陪席裁判官大澤廣，同田中邦治）で「集中審理方式」――一定の準備期間をおいて，その後一気に連日開廷して証人尋問などを行う審理方式――で行われることになった。平成13年9月4日から翌14年5月28日までに，検察側証人32人，弁護側証人13人の尋問が行われた。

## (13) 武の平成13年証言：「記憶にふたをしていた」

検察側の立証の柱は3人の女性の証言，とりわけ武まゆみの証言であった。

彼女は逮捕されて1ヶ月過ぎた頃から獄中で日記をつけていた。それは毎日の取調べの様子を克明に記録していた。この大学ノート10冊分の日記（「武ノート」）によれば，武が佐久間検事から「このままでは死刑になる」と脅され，かつ「自白すれば命は助ける」という約束をされ，これに基づいて風邪薬事件や渡辺荘事件の自白をしたことは明らかであった。また，彼女は佐藤が坂東大橋から利根川に飛び込んで自殺したという記憶をもっていたが，佐久間検事からそれは「科学捜査の結果」と矛盾し，佐藤殺害を否認し続けると「八木と同じ」＝死刑になると脅されて，渡辺荘事件の自白をしたことも明白である。

武は法廷では佐久間検事から刑の話をされたことはないと言って，自分の日記の記載を否定した。しかし渡辺荘事件の記憶がなかったことは認めた。八木から「佐藤さんは自殺したんだ」と繰り返し言われて洗脳されたために，恐ろしい事件の「記憶にふたをしてしまった」；佐久間検事の取調べによって自分の記憶に疑問を持ち，一生懸命に事件を思い出そうと努力しているうちに，さまざまな出来事の断片が音声や影像として蘇ってきた。武はそう証言した。

武の後に証言台に立った森田考子とアナリエも渡辺荘事件の記憶が当初なかったことを認めた。森田考子は「渡辺荘の玄関から先は真っ暗だった」「川の中からガラスのかけらを拾い集めるように，少しずつ話をすることができた」と証言した。それは彼女が断片的な事実を次々に上申書に書いていったことと符合する。アナリエも証言の最終段階に至って，渡辺荘での出来事を忘れていた時期があったことを認めた。

1980年代後半から90年代前半にかけて，全米各地で成人女性が子供の頃に父親から性的虐待を受けていたことを突然思い出したとして，父親を訴える事件が続発した。これは心理カウンセラーのカウンセリングを受けるうちに，カウンセラーから「性的虐待の記憶を抑圧している」と示唆された患者が，突然に影像や音声を伴うフラッシュバックを体験して，徐々にその実体が自分の性的虐待体験に結びつくものであることを自覚していくというものである。両親が「悪魔儀式」に参加している光景を思い出したと報告する人も少なくなかった。この「抑圧された記憶」と呼ばれるものは，実は，心理カウンセリングのプロセスで作り上げられた「偽りの記憶」ではないかと疑いをもつ心理学者が増え，冤罪を主張する父親を支援する団体もできた。

日本の捜査官が行う取調べが非常に濃密で過酷なものであり，取調べを受ける被疑者の記憶に変容をもたらす危険があることは，既に供述心理学者が指摘していることでもある。われわれは，供述心理学者でありアメリカの記憶研究にも詳しい東京都立大学助教授仲真紀子に武まゆみの供述調書を送って，彼女の渡辺荘事件の記憶の信憑性について鑑定してもらうことにした。仲の鑑定結果は，武の「記憶」はいわゆる「抑圧された，偽りの記憶」と呼ばれる特徴を備えており，その信憑性は非常に低いというものであった。

## (14) 武の平成14年証言：「『記憶にふた』は嘘でした」

われわれは，検察側の立証が終わった段階でこの鑑定書をわれわれの証拠の1つとして提出し，仲真紀子の証人尋問を行った。裁判所は仲の鑑定書を証拠として採用した。すると検察官は武まゆみの再尋問を要求してきた。われわれはそれに強く反対したが裁判所は再尋問を許した。他のすべての証人の尋問が終わった平成14年5月22日武まゆみは再び証言台に立った。尋問したのは佐久間検事である。

武　　：私は，捜査段階のときからずっと，前回の証人尋問のときにも言えなくて，隠していたことがありました。本当に申し訳なかったと思ってます。だから，今日はそれを告白しに来ました。

佐久間：それは，どういうことですか。

武　　：私は，佐藤さんに，大さじ１杯分のトリカブトをあんパンに詰めて，それを食べさせて殺したということは，今日まで忘れたことは１秒たりともありません。

＊＊＊

佐久間：忘れていなかった，１秒たりとも忘れていなかったと言いましたね。

武　　：はい。

佐久間：それは，あなたがずっと言っていた記憶にふたをしていたという証言が嘘だったという，そういう意味ですか。

武　　：はい，そうです。本当に申し訳なかったと思ってます。

武のこの証言は，彼女自身が書いた膨大な量の日記，そして前年秋に26回にわたって行われた証言を根底から覆すものであった。

## (15) 死因をめぐって

われわれは集中審理が始まる以前から佐藤修一の臓器に関してプランクトン検査が行われているのではないかと考えていた。その点について検察側に何度も問い質したが，検察官は「したとも，していないとも答えない」という返答を繰り返した。しかし，年が明けた平成14年1月9日になって，検察官はプランクトン検査の存在を明らかにし，それをわれわれに開示した。検査の結果は佐藤の肺と腎臓から利根川に生息するプランクトンが検出されたというものであった。

法医学の教科書によると，死体を川に投げ込んでもプランクトンは川の水と一緒に肺までは届くが，心臓が止まっているので血液循環がなく，肺以外の臓器まではとどかない。したがって，肺以外の臓器からプランクトンが発見されたときには，川の水に入った時点で心臓は動いていたことになる。すなわち，その死体の死因は溺死ということになるのである。検察側は，佐藤の死体を解剖した齋藤教授が取り出した臓器を同じポリバケツの中でホルマリン漬けにして保管していたから，腎臓のプランクトンは肺などにあったものが混入したのであって溺死の証明にはならないと主張した。われわれは，検査を行う前に科捜研の技官がホルマリンに漬かっていた部分を取り除いたはずであるし，肺から発見されたプランクトンの構成と腎臓から発見されたそれとは大幅に異なるから「汚染」ではないと反論した。

風邪薬事件についても死因は最大の争点であった。この事件は「風邪薬を凶器とした犯罪史上前例のない事件」と報じられた。風邪薬の成分であるアセトアミノフェンの副作用として有名なのは肝臓障害である。しかし森田昭は肝障害で亡くなったのでないことははっきりしている。森田は化膿性胸膜炎と肺炎を起こして死んだのである。検察側は，北村聖助教授の意見書などに依拠して，アセトアミノフェン→好中球減少→胸膜炎・肺炎という理論を主張した。われわれは，アセトアミノフェンによって好中球減少が起こる可能性は非常に低く，それによる死亡例は1件も報告されていないこと，むしろ森田昭はアルコール依存症にかかっており，アルコール依存症患者の栄養失調や肺炎は相当の頻度で起こり得ることを指摘し，慶応大学医学部の加藤眞三講師の意見書や各種の医学文献を証拠として提出した。

そもそも，八木の指示で森田昭や川村に連日風邪薬を飲ませたという話は，「実行犯」武まゆみの証言しかこれを裏付ける証拠がない。彼女の供述は佐久間検事による死刑の威嚇や死刑を求刑しないという約束によるものであって証拠能力はない。そして，森田昭の臓器や毛髪から検出されたアセトアミノフェンは，八木が森田昭から頼まれて彼に届けた風邪薬を同人が「痛み止め」として濫用したことによって説明がつく。われわれはそう主張した。

# ２．第一審での死刑判決

平成14年10月1日，さいたま地方裁判所第2刑事部は，全ての訴因について八木を有罪と認定し，彼に死刑を宣告した。われわれの主張はことごとく退けられた。

武と検察官の間に「異様に緊密な状況と度を越した気遣いが看取される」「捜査段階において，日記の記載そのままでないにせよ，これに関連する量刑をテーマとした何らかの会話が捜査官との間でなされた疑いは濃厚と言わなければならない」。そう言いながら，裁判所は，取調室の中で武と佐久間検事との間で具体的にどのようなやり取りがあったのか，何も認定しなかった。そして，捜査中の出来事は法廷での証言の証拠能力に影響を与えないと断定した。「記憶にふたをしていたというのは嘘でした」という平成14年再尋問での武証言は，死刑の恐怖から解放されて，真相を証言したと見るのが「自然な見方」だと裁判所は述べた。腎臓からプランクトンが発見されたとしても「汚染の可能性を否定できない」から溺死とは断定できない。判決はそう言い，かといって，佐藤の臓器からトリカブトの成分が検出されたという鑑定結果も，佐藤がトリカブトで殺害されたことの決め手にはならないと付け加えた。結局，判決は科学的な鑑定結果によってではなく，武まゆみの証言によって佐藤はトリカブト毒で死亡したと認定したのである。

風邪薬事件についても，裁判所は武まゆみの証言に全面的に依拠した。森田の死因や川村の「症状」について，われわれが提起した疑問を検討した形跡はほとんど見られない。森田の胸膜炎や肺炎の原因がアセトアミノフェン以外の原因である可能性について裁判所が深刻に考えた様子は，少なくとも判決文からは全くうかがえない。

# ３．控訴棄却判決

われわれは直ちに控訴を申立て，平成15年12月15日，10の法令違反と渡辺荘事件，風邪薬事件双方についての事実誤認を控訴趣意として提出した。

控訴審が係属した東京高裁第10刑事部（須田贒裁判長）は，第1回公判において，弁護側の新たな証拠請求のほとんどと，提出命令，証拠開示命令を却下した。弁護側が請求した証拠のなかには，渡辺荘事件について記憶がなかったことを弁護人に認めた森田考子の弁護人に対する供述録取書や，このままでは死刑になるからとにかく思い出さなければならないという焦燥感にかられた心境を家族に訴えた武まゆみの手紙などがある。

他方で，検察官が請求した武らの判決書を，弁護人の異議にもかかわらず採用した。この判決書は，第1審の検察官が提出して却下されたものである。

そして東京高裁第10刑事部はこのわずか1回の公判で事件を結審させ，平成17年1月13日控訴を棄却した。

# ４．上告棄却判決

われわれは直ちに上告を申立て，上告審において，一審と二審の手続には7つの憲法違反と判例違反があると主張した。そして風邪薬殺人事件もトリカブト殺人事件も存在しないことを詳細に論じた。

われわれは平成20年3月13日，最高裁第1小法廷で裁判官たちに正義の実現を訴えた。

しかし最高裁第1小法廷は，平成20年7月17日この9つの上告理由を「実質は事実誤認，単なる法令違反の主張であって，刑訴法405条の上告理由に当たらない」と言って，2パラグラフ（262文字）で退けた。

弁護人は最高裁判所の上告棄却判決に対して異議を申し立てたが，同年８月６日，最高裁判所は異議申立を棄却し，請求人に対する死刑判決が確定した。

# ５．第一次再審請求

　われわれは、2009年1月30日にさいたま地方裁判所に再審請求をした。武まゆみ作成の手紙、森田考子の供述録取書、大野曜吉日本医科大学教授作成の意見書（佐藤修一の死因に関するもの）、“偽りの記憶”に関する仲真紀子北海道大学教授作成の意見書、その他偽りの記憶についての外国論文など22点の証拠を新証拠として提出した。また、われわれはさらなる証拠開示を求めた。

　ところが、さいたま地方裁判所第２刑事部（中谷雄二郎裁判長）は三者協議を開くこともなく、証拠開示の勧告などを行うこともなく、ほぼ何らの審理もしないまま2010年3月18日に再審棄却決定をした。

# ６．即時抗告棄却決定

　われわれは、この再審棄却決定に対して直ちに即時抗告を申し立てた。即時抗告審では裁判所、検察官、弁護人の三者協議が開かれることとなり、証拠開示について話し合われた。その結果、確定審では開示されなかった武まゆみの供述調書やその他捜査報告書などの証拠が66点あらたに開示された。

さらに、われわれは佐藤修一の死因に関する大野意見書の「明白性」を明らかにするべく、裁判所に佐藤の死因についての鑑定を求めた。その結果、裁判所は鑑定を実施することとし、さいたま地検に保管されていた佐藤の臓器を用いて、再度佐藤の死因を鑑定することとなった。鑑定人は、我が国の溺死鑑定における第一人者である甲大学法医学教室A教授とされた。そしてその結果、佐藤の死因は溺死であるとの結論が示された。第一審以来弁護団が一貫して主張し続けてきた事実が明らかとなった。

ところが、2015年7月31日東京高等裁判所第10刑事部（村瀬均裁判長）は抗告棄却決定をした。

# ７．特別抗告棄却決定

　われわれは、この抗告棄却決定に対して特別抗告を申し立てた。その理由は、「無罪を言い渡すべき明らかな証拠」の意義についての白鳥事件最高裁決定、財田川事件最高裁決定に違反すること、専門家の意見尊重義務を判示した平成20年4月25日判例違反であった。

　ところが、2016年11月28日最高裁判所第三小法廷（岡部喜代子裁判長）は抗告棄却決定をした。

Ⅱ　新証拠

　弁護人が本再審請求において提出する新証拠は以下のとおりである。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 番号 | 標題 | 作成者 | 作成日 |
| １ | 鑑定意見書 | 逸見明博 | 2016.6.8 |
| ２ | 鑑定書（別冊あり） | A | 2014.8.6 |
| ３ | 意見書 | A | 2016.2.25 |
| ４ | 証人A尋問調書 | 東京高裁第10刑事部書記官東郷友整 | 2013.10.25 |
| ５ | 鑑定人A尋問調書 | 東京高裁第10刑事部書記官東郷友整 | 2014.3.10 |
| ６ | アナリエの供述録取書 | 弁護士鈴木貴子、弁護士松山馨 | 2015.8.26 |
| ７ | アナリエの供述録取書 | 弁護士須﨑友里 | 2016.4.6 |

Ⅲ　逸見意見書（証拠番号１）

# １　風邪薬事件についての確定第一審判決の認定事実とその証拠

## (1) 認定事実

風邪薬事件について、確定第一審判決は、

請求人が、武らと共謀の上、關を被保険者とする生命保険契約に基づく死亡保険金等を取得する目的で關を殺害しようと企て、平成10年8月ころから、同11年5月下旬までの間、關に対し、反復継続してアセトアミノフェン等を含有する総合感冒薬等及び高濃度のアルコールを含有する飲料を多量に嚥下、飲用させるなどし、よって、総合感冒薬等の過量長期連用による副作用等によって好中球の減少及び低栄養状態による抵抗力の低下を惹起させ、同月29日午前2時ころ、關をこれに伴う化膿性胸膜炎、肺炎等により死亡させて殺害した。

という事実を認定した。確定第一審判決は、「好中球の減少」を認定するに当たり、小林宏之が、末梢血の好中球が減少していると判断したと供述したことを認定の重要な根拠としている。

## (2) 小林宏之の判断手法

好中球減少症とは、末梢血中の好中球数の異常であり、末梢血を採取して好中球の個数を数えることにより判断される。關の末梢血・心臓血は、關の解剖を担当した法医学者齊藤一之により埼玉県警に提出されている。しかし、検察官は、当該末梢血・心臓血に関する証拠を一切提出しなかった。

この裁判において關に好中球減少症があったことを示す証拠として検察官が提出したものは、炎症を起こしている關の肺の組織を撮影した顕微鏡写真（以下「参考写真」という。）と、その写真を見た小林の捜査関係事項照会回答書及び証言である。本再審にいたるまで、關の末梢血、心臓血といった証拠物は一切開示、提出されていない。

そして、小林が末梢血の好中球が減少していると判断した手法は以下の通りである。

①　一般に細菌性肺炎は、末梢血、肺炎局所ともに好中球が増加し、その極期は、局所においては全細胞の70～90％を占めるとされているのに対し、末梢血好中球減少症における肺炎では、肺炎極期においても好中球比率は70～90％に満たない例が多い。

②　参考写真一枚から、好中球と単核細胞（リンパ球、マクロファージの合計）の比率を2名に算出させたところ、一名の者は、好中球41％、リンパ球[[1]](#footnote-1)59％、他の一名の者は好中球51％、リンパ球48％（合計値が100％にならないのは、判別不能があるため）であった。すなわち、好中球比率は、通常の肺炎極期に比し、明らかに減少している。

③　肺炎局所における好中球比率の低下は、末梢血好中球の減少か肺炎の過程で治癒期に近づいたことの2つの原因が考えられるところ、組織像で見る限り肺炎極期の組織像として判断して差し支えない。

④　よって、好中球比率の減少から、末梢血好中球の減少が認められる。

しかし、今般提出する逸見鑑定意見書より、小林によるこのような判断手法が誤りであり、参考写真から好中球減少症を認定することなど到底できないことが明らかとなった。

# ２　逸見明博教授の鑑定意見書（証拠番号１）

## (1) 内容

本請求にあたり、提出した新証拠１は、日本大学医学部病態病理学系人体病理学分野教授の逸見明博氏が、参考写真から、好中球減少症の認定をすることの可否について鑑定意見を述べたものである。新証拠１別紙に記載のとおり、逸見氏は、約30年病理学に携わっている専門家である。その逸見氏は、結論として参考写真から、これが好中球減少症の患者の肺炎と判断することはできない、むしろ、好中球減少症はなかったと考えるのが自然である、と結論付けた。

逸見氏は、まず、好中球減少症があるかどうかを判定する場合は、骨髄や末梢血の所見が必要であり、肺の組織写真から好中球減少症を判断すること自体が問題であると指摘し、そのことは逸見氏以外の病理学者も同様の指摘をしているとのことである。そして、小林氏が実施したような、組織写真から細胞を同定するということ自体、本来的に困難な作業であり、多くの細胞は同定困難であるとした。そのことを前提にしながら、あえて細胞を算出すれば、参考写真において出現している細胞の大半が好中球であると考えられると述べている（1頁）。また、逸見氏は、他5名の病理医についてもアンケートを行い、比率を計測しているが、下記のグラフのとおり、結果にはかなりばらつきがみられた（2頁）。

【グラフ省略】

このことは、まさしく参考写真のような組織写真から好中球などの細胞の比率を算出することがいかに困難かを示している。つまり、小林が前提とした好中球比率が41％又は51％という比率の信用性は極めて低いことが明らかになった。

また、仮に参考写真の好中球比率が41％又は51％だとしても、それが好中球減少症を示すものではない。すなわち、肺の一部の組織写真の好中球比率と、末梢血中の好中球が減少していることは関連しないということである。また、炎症の時期との関連からも、本件では好中球減少症とは到底いえないことも新証拠１で明らかとなった。逸見氏は、組織障害が起こった場合の反応について以下のように述べる。

①　組織障害に対する局所の反応を炎症反応という。炎症反応には、急性（細胞が壊死してから時間が経っていない段階）の浸出性炎と慢性（細胞が壊死してから時間が経っている段階）の増殖性炎がある。組織障害が起ると、浸出性炎という反応が起こったのち、増殖性炎という反応が起こる。浸出反応とは、局所の血管が拡張し充血（動脈血が増える状態）や浸出（血管内の成分が血管外に出ていく現象）がおこる反応をいう。増殖反応とは、線維芽細胞が増殖し壊死組織を線維性結合組織（線維性結合組織とは、線維芽細胞と、線維芽細胞によって作られた多量のコラーゲン線維からなる組織である。）で置き換えようとする反応をいう。なお、繊維性組織は、増殖の過程で肉芽組織とよばれる時期から瘢痕組織と呼ばれる組織へと移行していく（肉芽組織から瘢痕組織への変化を器質化がおこるという。）。

なお、組織障害が起こっても反応の起こらない変質性炎という概念もあるが、参考写真は、浸出反応の像を示しており、変質性炎とは考えられない。

②　細菌感染による組織障害が起こると局所に多量の好中球の浸出が見られる。これを化膿性炎とよび浸出性炎の一つである。好中球が細菌を貪食した後、少し遅れてマクロファージが浸出し、壊死組織等を盛んに貪食する。マクロファージによって病巣部が綺麗になると増殖反応が起こり、リンパ球も増殖する。すなわち、下記の図のとおり、炎症反応のどの段階であるかによってどの細胞が多いかは異なり、急性期には好中球が多く集まり、慢性期に至るにつれて好中球の数は減少するのが通常の炎症経過である。



③　炎症病巣において肉芽組織は病巣と正常部組織の移行部から発生し病巣の中心部に向かって器質化が進展する（図の①～④の順番）。したがって、細胞の壊死から同じくらいの時間が経過した細胞であったとしても、その観察する部位・場所によっては、好中球が多い場所とマクロファージが多い場所、リンパ球が多い場所が存在することになる。すなわち、組織の一部分の写真のみから、組織全体の好中球が少ないとか多いとか評価すること自体が非科学的であることを示している。



④　その中でも肺炎は、肺の中で時間と場所を異にして炎症病巣が多発して発生してくる。したがって、下記の図のように新旧の病巣が重なりあうと、組織像は複雑化し、好中球、マクロファージ、リンパ球も混在することになる。すなわち、肺の一部の組織画像のみから、好中球、マクロファージ、リンパ球の比率を語ることは極めて非科学的であり、肺炎の特徴を全く捉えていないということである。



と説明している（2～12頁）。

ここまでの話をまとめると、組織障害が起こった場合の好中球、マクロファージ、リンパ球の比率は、

①　同じ組織障害でも、どの段階であるかによって異なる。

②　同じ組織障害でも、どの場所を切り出したかによっても異なる。

③　新旧の病巣の重なり合いの有無等でも異なる。

のである。このように諸条件で比率が大きく異なる前提を無視し、参考写真1枚における好中球比率から好中球減少症を導くことなどできるはずがない。まして肺炎の病巣についての組織写真1枚から好中球減少症を導くことは尚更不可能ということである。

実際、逸見氏は、解剖所見から、肺の病巣には化膿性炎という浸出反応だけでなく、慢性炎病巣も含まれていたことが明らかとも述べている（16頁）。つまり、關の肺にはリンパ球が増殖している病巣部（上記の図の「増殖反応の時期」の細胞）もあったということである。これは、關が参考写真の中の好中球の数が少ないことと、關が好中球減少症に罹患しているかどうかとは全く関連性がないことを示している。

さらに、もし好中球減少症を持っている患者が肺炎に罹患した場合には、通常見られる細胞の組織反応（壊死→血管（浸出）反応→増殖反応）が起こらないと考えられる（そのことを「変質性炎」と呼ぶ）ところ、關の肺炎は剖検において化膿性胸膜炎、肺炎とされているように化膿性肺炎の像を示していた。この化膿性肺炎というのは、浸出性炎であり、このような所見を示していることからも、關が好中球減少症であったことは否定される。

すなわち、逸見氏が述べるとおり、關には好中球減少症などなかったということである。

## (2) 証拠の新規性・明白性

この証拠は、平成28年6月8日、逸見氏が作成したものであり、これまで審理において提出されたことは一切ない。当然、新規性が認められる。

そして、この新証拠により、確定第一審判決が「好中球の減少」を認定するに当たり、重要な根拠とした小林の供述が信用できないこと、むしろ参考写真からすれば、好中球減少はなかったと考えるのが自然であることは明らかとされた。

確定第一審判決は、小林の他に、矢田純一の供述[[2]](#footnote-2)から「弱毒の口内常在菌に感染して肺炎等を引き起こした要因としては、人体においてこれらの細菌を殺菌する役割を担っている好中球の数か機能、殊に好中球の数の点で何らかの異常を来していたものであることが可能性として最も高いことが認められる」と認定している（なお、矢田と同旨の説明をした北村聖の供述[[3]](#footnote-3)も裏付けとなるとしている。）。しかし、矢田の供述も北村の供述も關が好中球減少症であったことを必然的に導く証言ではない。アルコールを摂取したことにより低栄養状態による好中球機能の異常を抱えていた可能性等好中球減少症以外で死亡した可能性を排斥できないからである。結局、關の好中球減少症を明確に述べていたのは小林宏之ただ一人であり、その供述が信用できないことが本証拠によって明らかになり、むしろ、關には好中球減少症はなかったことが明らかになったのだから「好中球の減少」という認定を維持することができないことは当然である。

本件の訴因の因果の流れは、アセトアミノフェンとアルコールの過量長期連用→好中球減少・低栄養状態→化膿性胸膜炎・肺炎→死亡というものである。好中球減少が認定できない以上は、因果の流れが証明されていないことになる。つまり、この逸見意見書は無罪を言い渡すべき明らかな証拠といえる。

Ⅳ　A鑑定（証拠番号２，３，４，５）

確定審は、トリカブト事件について、請求人が武、アナリエ及び森田と共謀のうえ平成7年6月3日、埼玉県本庄市寿2丁目14番9号所在の渡辺荘において佐藤修一にトリカブトを食べさせて殺害し、その後すでに死後硬直していた同人の死体を利根川に流したと認定した。

平成26年8月6日付けA甲大学教授の鑑定書（以下「A鑑定書」という。新証拠2）は、佐藤氏の死因が溺死であると結論付ける法医学鑑定であり、平成28年2月25日付け同人意見書（以下「A意見書」という。新証拠3）は第一次再審請求即時抗告審がA鑑定書の証拠としての明白性を否定した理由づけに対し、A教授が反論したものである。また、A鑑定書の信用性を補完する意味合いで、A教授に対して東京高裁が実施した2つの尋問調書（平成25年10月25日証人A尋問調書（以下「A証人尋問調書」という。新証拠4）および平成26年3月10日鑑定人A尋問調書（以下「A鑑定人尋問調書」という。新証拠5））が存在する。

これらの証拠は新規性が認められ、また佐藤氏の死因をトリカブトとした確定審の認定に合理的な疑問を投げかけるものであり明白性も認められるので、無罪を言い渡すべき明らかな証拠（刑事訴訟法435条6号）である。

# １　A鑑定書及びA意見書に共通する前提事情

## (1) 教授の経歴

A教授は、甲大学大学院医歯学総合研究科法医学分野の教授である。乙大学医学部医学科を卒業後、同学部法学教室助手、講師を務めた後、西ドイツ（当時）の丙大学法医学研究所に留学し、帰国後は甲大学医学部法医学教室の助教授、同教授を経て、現職にある。日本法医学会の理事などの要職を歴任している（A鑑定人尋問調書参照）。

これまで捜査機関の依頼に基づき、30年にわたって150件程度の溺死鑑定を実施してた経験を有する。溺死鑑定の第一人者の1人である。溺死鑑定に関する多数の論文を発表しており、以下はその一例である。

1. 「プランクトン検査（珪藻法）による溺死判断の実際」法医病理10巻11号
2. 「溺死判断の問題点―問題提起に変えて　プランクトン検査（珪藻法）による溺死判断の実際」法医病理10巻25号
3. 「鹿児島県における浴室内突然死の実態と今後の課題」日本温泉紀行物理医学会雑誌72巻1号46頁
4. 「胃に裂傷を認めた潜水夫の溺死例」日本法医学会雑誌54巻3号502頁
5. “The number of diatoms recovered from the lungs and other organs in drowning deaths in bathwater”Legal Medicine Vol.13, Issue 4，July 2011

## (2) A鑑定において実施された珪藻検査の概要

A教授が今回用いた鑑定方法はいわゆる珪藻（プランクトン）検査である。溺死鑑定の“Gold standard test”[[4]](#footnote-4)と呼ばれ、国際的に最も信用のおける溺死鑑定のひとつとされる。日本の警察も溺死鑑定の有用性を高く評価し、事件性が疑われる水死体には珪藻検査による溺死鑑定を実施するのが通例である。そのため全国の法医学教室のうち8割程度、国立大学に限れば8割5分程度が、溺死鑑定の手法として珪藻検査を実施している。

珪藻検査が溺死鑑定にとって有用とされる機序は以下のとおりである。生きている人間は肺や心臓が動いているので、溺水すると一定数の水が肺に取り込まれる。取り込まれた水の量による圧力が一定限度を超えると、肺胞と毛細血管の間にある肺壁が破れ、肺内の水が循環血液に取り込まれる。心臓が動いているため血液に取り込まれた水が血流にのって肝臓、脾臓、腎臓などの大循環系の臓器に到達し、さらに終着点である心臓に到達する。溺水現場の水に珪藻が含まれている場合には、その珪藻が肺内に取り込まれた水とともにこれらの臓器に滞留することとなる。他方、死後に水に投棄された場合には、肺や心臓が動いていないので、肺内に取り込まれる水の量は少ないため、検出される珪藻の数も少ない。また、血流が動いていないため、珪藻が血流を通って大循環系に到達することはあり得ない。

以上の溺水における機序を踏まえると、死因判断に重要な点は、肺に含まれる珪藻が相当数か否か、大循環系の臓器から珪藻が検出されるか否か、各臓器に含まれる珪藻が対象水に含まれる珪藻の種類と矛盾しないか、大循環系の臓器の種類が肺壁をすり抜けられるような形態（小さいものや細長いもの）かどうかといった要素となる。

なお、死因鑑定に当たっては、珪藻検査のみに頼ることはせず、水死体が発見された際の状態、検死の際の各臓器の状況などを珪藻検査の結果と合わせて検討し、総合的に死因を判定する。

## (3) A鑑定において実施された珪藻検査の概要

A教授によれば、通常の珪藻検査の手法は以下のとおりである（珪藻検査に関する以下の主張は、新証拠2、3、4を参照）。

1. 対象臓器

肺、肝臓、左右の腎臓及び脾臓を対象とする。

1. トリミング

臓器の採取の際は、外部に触れていない中心部を対象とするためにトリミングを行う。肝臓や肺のような大きな臓器の場合は表面から1センチ以上を取り除くことができるが、脾臓など小さな臓器は表皮をはぐなど、数ミリ程度のトリミングしかできないこともある。

1. 対象臓器の重量

トリミング後の対象臓器は、肺20グラム、その他の臓器10グラムが標準の重量だが、その半量で実施する研究所もある。

1. 洗浄

細胞ごとになるべくきれいに洗う。

1. 壊機

フラスコの中に入れて硝酸と硫酸で臓器の組織を破壊する（壊機）。

1. 測定

水で洗い、プレパラートの上に乗せ、顕微鏡でプランクトンの有無、種類、数を測定する。種類の測定は、大まかなタイプごとに分類し、また水死体が発見された付近の対象水に含まれる種類と比較する。

## (4) コンタミネーションについて：コンタミネーションが珪藻検査の信用性に及ぼす影響は相対的なものである

コンタミネーション（資料汚染・迷入）とは、水を吸入した結果体内に取り込まれたものではなく、その他の経路から肺やその他の臓器に迷入した珪藻が検出されてしまうことである。珪藻検査の正確性を期すために、コンタミネーションの影響はできる限り排除される必要がある。A教授が珪藻検査の一般的な手法において、臓器の取り出しの際に外部に触れた部分を切除したり（トリミング）、対象の臓器を洗浄水できれいに洗うのはこのコンタミネーションの影響をできる限り排除するためである。

控訴審は、佐藤氏の臓器について、1）臓器の摘出過程において汚染防止の措置が取られていない、2）各臓器は5年間にわたり同一のホルマリン水溶液に浸され保管されていた、3）本件の捜査段階で南雲保日本大学教授（当時）が平成12年9月22日付鑑定書（確定第一審甲1975号）及び平成13年8月20日付鑑定書（同甲1980号）の作成過程で実施した資料調整において、摘出された臓器の断面が汚染された可能性があるという3つを具体的にあげて、コンタミネーションの可能性がある以上珪藻検査の信用性を認めることはできないと判示した。

しかし、多数の鑑定経験を有するA教授によれば、「珪藻というのは植物性プランクトンで、結局水の中を浮遊しているか、くっついているだけなのっで、きれいに洗い流せばそこまで奥のほうまでは」汚染は及ばない（A尋問調書6頁～7頁）。つまり、たとえ臓器の摘出過程において汚染防止の措置が取られていなかったり、臓器同士が同一のホルマリン水溶液に浸されていたとしても、表皮をはいだり、表面をきれいに洗い流すことによって、コンタミネーションの影響は相当程度排除できる。言い換えれば、独力では移動しない珪藻が臓器の内部にまで侵入するのは、血管のような中に通っている穴や亀裂などを経由した場合に限られる。内部にまでコンタミネーションが及ぶことが原則としてあり得ないのである。

また、A教授によれば、ある程度のコンタミネーションは絶対に避けられないものであるが、経験ある法医学者の分析によって、検出された珪藻がコンタミネーションによるものか否かを判断することができる。分布の特異性や具体的に想定される機序などによって、検出された珪藻がコンタミネーションであると積極的に認められるならば格別、コンタミネーションの抽象的な可能性があることのみで、珪藻検査の信用性を一律に否定することはできない。

# ２　A鑑定書の内容

A鑑定書の結論は、「佐藤修一氏の直接死因は溺死であると判断する」というものである。

## (1) 鑑定手法

A教授が本件で採用した鑑定の手法は以下のとおりである。

1. 対象試料

本件で保存されていた臓器は、肺、心臓、肝臓、腎臓の四種類であり、これらの臓器が対象試料とされた。

このうち肺、心臓、肝臓の3種類の臓器はホルマリン保存と冷凍保存の2種類が保存されており、両者が合わせて資料とされた。いずれもトリミングされて外側と内側に分けられており、それぞれの重量は以下のとおりである。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 臓器 | 内と外の別 | 重量(g) |
| 肺 | 内側 | 7.9 |
|  | 外側 | 10.7 |
| 肝臓 | 内側 | 20.4 |
|  | 外側 | 20.8 |
| 心臓 | 内側 | 14.6 |
|  | 外側 | 20.3 |

腎臓は、南雲鑑定の残りかすのような形状のものが数個程度しか残されておらず、すべて合わせても2g程度であったため、トリミングをすることができず、まとめて検査試料とされた。

　なお、各試料の形状などの詳細はA鑑定書記載のとおりである。

以上の臓器のほか、洗浄に用いられた蒸留水が対象水として珪藻検査が実施された。

1. 臓器の切り出し、洗浄

　一臓器ごとに新しい使い捨ての手袋を用いて、着用後に洗浄水で洗浄し、また一臓器ごとに使い捨てのナイフを用いて使用のたびに洗浄し、さらに俎板代わりのアルミホイルも一臓器ごとに取り替えている。

1. 壊機・測定

強酸で珪藻を壊機し、洗浄したうえで、プレパラート上に載せて顕微鏡で珪藻の属類と個数を測定した。測定結果は写真によって報告されている。

1. 測定結果

　各試料から検出されたプランクトンの数は以下のとおりである。その種類や形状など詳細は鑑定書を参照されたい。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 臓器 | 内と外の別 | 1gあたり個数 |
| 肺 | 内側 | 502.5 |
|  | 外側 | 274.8 |
| 肝臓 | 内側 | 0.29 |
|  | 外側 | 0.14 |
| 心臓 | 内側 | 0.14 |
|  | 外側 | 0.74 |
| 腎臓 | NA | 26.0 |
| 対象水 | NA | 0 |

## (2) 死因鑑定の方法

A教授は、①今回の珪藻検査の結果、②南雲教授による珪藻検査の結果、③検死の際の検査所見を総合的に考慮して鑑定結果を導いた。

第1に、今回の珪藻検査の結果として重視するのは、肺内から比較的多数（1gあたり502.5個）の珪藻が検出されたこと、並びに肝臓の内側及び心臓の内側からそれぞれ少数（肝臓1gあたり0.29個、心臓1gあたり0.14個）の珪藻が検出され、かつその属類が肺の内側から検出されたものと一致したことである。これらはいずれもヨーロッパや日本の法医学者の大部分が溺死の確証とみなす値であり、溺死であることの有力な根拠となる。

第2に、南雲教授の珪藻検査によれば、肺の内側2.39gから109個の珪藻が検出され、また腎臓内側10.43gから5個の珪藻が検出されており、その形状はいずれも小さいものが多く、かつその種類はいずれも肺の内側から検出されたものと同種類であった。このことは佐藤氏の死因が溺死であることを示唆するものである。

第3に、南雲鑑定とA鑑定を比較すると、検出された珪藻の種類はいずれもかなり類似しており、両者あいまって鑑定の正確性を補強しあうものであり、佐藤氏の死因が溺死であることを示唆する。

第4に、佐藤氏の司法解剖（平成12年9月5日付け齋藤一之らによる死因鑑定書、確定審甲19号）によれば、佐藤氏の死体は腐敗しているため正確な診断を得ることは困難であることを前提としつつも、①高度の損傷や病変は認められず損傷死や病死の可能性は低いこと、②死後変化の信仰した死体でほぼ唯一溺死を示唆する解剖所見である胸腔内貯留がみられること、③その色は暗赤色であり溺死の際の胸腔内貯留と考えて矛盾しないこと、④胸腔内貯留液と肺重量の合計重量が1000gを超えることが溺水の吸引が疑われる所見の一つであるところ佐藤氏のこれらの合計重量は1090gであり1000gを超えていること、⑤溺死指標と呼ばれる独自の指標（肺重量＋胸腔内液重量）÷（脾臓重量）が14.1を超えていると溺死が示唆されるとされているところ佐藤氏のこの数値は21.8であり14.1を超えていることなど、溺死を示唆する所見をいくつか示している。

これらを総合的に考慮することにより、佐藤氏の死因は溺死であると結論付けられる。

## (3) コンタミネーションに関する判断

A教授は、今回の検査結果のうち、いくつかの珪藻は汚染による可能性があるとする。すなわち、肝臓外側から検出されたもののうち比較的長い形状の珪藻（Synedra）1つ、心臓外側から検出された珪藻類のいくつか及び腎臓から検出されたものについては、いずれも臓器の外側（肝臓及び心臓）、あるいは以前の珪藻検査の残りかす（腎臓）であって、蒸留水の洗浄によっては落としきれないものが混入したとみられると判断する。

他方、肺内側、肝臓内側及び心臓内側については、①蒸留水で外部を念入りに洗い流したうえ、十分にトリミングを行ったこと、②検査過程において迷入の可能性をできる限り排除したこと、③肝内側及び心臓内側から検出された珪藻の属類は、肺内側から検出された属と一致していること、④個数からしても長さからしても溺死の際に各臓器に到達したと考えて矛盾しないことから、コンタミネーションが鑑定結果の信用性に影響を及ぼすことはないとする。

## (4) 鑑定の結論

以上を総合的に勘案して、佐藤氏の直接死因は溺死であると判断されている。

# ３　A鑑定書は無罪を言い渡すべき明らかな証拠である

## (1) 新規性

　A鑑定書は前述のとおり第一次再審請求の即時抗告審において裁判所が実施した鑑定の際に作成されたものである。刑訴法435条6号がいう証拠の新規性について、徳島ラジオ商殺し事件再審開始抗告審決定（高松高決昭和58年3月12日判例時報1073号3頁）において、「再審請求棄却決定の確定力を破るための新証拠の問題と原判決の確定力を破るための新証拠の問題を区別し、後者のためには原判決後に発見された新証拠のすべてを刑訴法四三五条六号にいう新たに発見された証拠と解すべきだとするものであって、このことは、原決定が述べている請求が部分的に数次に行われた場合と周到なる準備のうえ一時になされた場合との権衡論からみて正当である。」と判示されている。すなわち、証拠の新規性とは、判決確定後に発見された証拠か否かという観点から判断されるべきものであり、A鑑定書が刑訴法435条6号規定の証拠の新規性の要件を満たすことは明らかである。

##  (2) 明白性

A鑑定書は、長年にわたり法医学に携わり、多数の溺死鑑定の経験を有する専門家が、専門的な方式に基づいて実施して作成されたものである。内容も合理的で説得的であるから、十分に信用性が認められる。

そしてその結論は佐藤氏の死因は溺死であるというものであるから、確定審によるトリカブトによる毒殺という死因認定を覆すものであり、A鑑定書に明白性が認められることもまた明らかである。

# ４　A意見書の内容

A意見書は、第一次再審即時抗告審によるA鑑定書に対する批判（以下A意見書の表現に合わせ「村瀬決定」という）に対し、A教授が再反論したものである。

その結論は、村瀬決定はA鑑定の内容を誤解するか検査法の原理自体を曲解するものであり到底納得できるものではなく、村瀬決定による批判を踏まえてもなお佐藤氏の直接死因は溺死であると判断されるというものである。

## (1) 村瀬決定によるA鑑定批判

同決定は、概要、①コンタミネーションの可能性を払しょくできておらず珪藻検査の信用性には疑問が残る、②肺から検出された珪藻は、水中に浮遊する間に増殖した可能性があるし、死後に肺内に河川水が侵入した可能性もある、③その他の臓器（心臓、肝臓、腎臓）から検出された珪藻数は少数にとどまるので、コンタミネーションではないと断定しうるだけの根拠がないとして、A鑑定の信用性を全面的に否定した。そのうちコンタミネーションに関する理由づけの詳細は以下のとおりである。

第1に、肺に関して、検出された珪藻の属類や分布に関するおおよその傾向だけで汚染が全くないと判断しうるか疑問が残り、また肺の外側より内側のほうが検出された珪藻が多いという結果について、汚染の影響を考慮しなくてよいのか疑問が残る。

第2に、肝臓に関して、外側より内側のほうが検出された珪藻の数が多い理由が明らかでない。

第3に、腎臓に関して、A鑑定は多量の珪藻が検出されたのは切り出し後に無神経に扱われた結果の汚染によるものと判断するが、だとすればほかの臓器についても同様の取扱いによる汚染の可能性がないか疑問が残る。

第4に、いくつかの珪藻については、入念に洗浄しても完全に除去できなかったとして汚染の可能性を指摘するが、対象の臓器は解剖した医師がどのように臓器を摘出したかが明らかでないことなどを考慮すると、洗浄しても汚染を除去できなかった理由は、汚染が外部のみならず内部に及ぶものが相当数あったからではないかという疑問が残る。

なお、手続き上の問題として強調されるべきこととして、即時抗告審は鑑定書の内容に関してA教授の証人尋問を実施していない。鑑定を正式に依頼する際に実施した証人尋問においては、尋問を担当した裁判官自身が、「恐らく鑑定書提出後、それに関して尋問をさせていただく際に、試料調整をどういうふうにされましたかという質問がまた幾つかあると思います。当然、裁判所からも確認させていただくと思います」、「鑑定書の内容ですとか、その前提となっているいろいろな事実とか、そういうものについて尋問をさせていただくことになると思います」、「その際は、お手数ですが、恐らく東京までお越しいただくこともあろうかと思います。よろしくお願いします」と述べていた（A鑑定人尋問調書3頁）にもかかわらず、裁判所が、自ら採用した鑑定人の証人尋問すら実施しないまま、その鑑定書の信用性を全面的に否定した理由は不明である。

## (2) A意見書の内容

A意見書の内容は大きく4項目に分かれる。

第1は、コンタミネーションに関する村瀬決定の理由づけに関する反論である（「1．「ア　試料汚染の可能性について」に対する意見」）。

まず、A教授は、すべての臓器に共通する前提として、汚染原因となる珪藻が臓器の内側に存在することはあり得ず、どんなに臓器を雑に取り扱ったとしても汚染されるのは外側に限られることを強調する。これは極めて重要な指摘である。内側にコンタミネーションが及ばない以上、トリミング後の臓器にコンタミネーションが生じる可能性は原理的に否定されるのである。

そのことを前提にしたうえで、まず村瀬決定が指摘する肺のコンタミネーションに関して、本来であればトリミング後の内部についてはコンタミネーションの可能性を検討すらしなくてよいが、本件では念のために、資料の内部と外部の検査結果を分析して、コンタミネーションの可能性を検討したものであり、内部にもコンタミネーションが生じるというありえない前提を具体的な可能性とすることはできないと指摘する。

また、村瀬決定は肺に汚染が全くないと判断しうるかは疑問が残るなどと批判するが、もともとA教授が鑑定人として選任される際の尋問において述べていたとおり、コンタミネーションを完全に排除することは不可能であるし、そのように断定することはできないと批判する。

さらに、村瀬決定は、肺の外側より内側のほうが検出された珪藻数が多いことの理由が明らかでないとするが、鑑定書内に記載したとおり、肺に分布する気管支の太さは中枢側（内側）から末梢側（外側）にいくほど細くなるため、吸引した水の量も外側に行くほど少なくなるものであり、何ら不自然なことではない。

加えて、そもそも肺内には死後にも河川水が侵入することがありうるため、肺の検査結果をそのまま溺死の判断自体には使用しておらず、肺の検査結果は溺死と考えて矛盾しないという根拠として使用しただけであることを強調する。肺のコンタミネーションはあったとしても鑑定結果に影響を及ぼすものでなく、そのことを理由に鑑定全体の信用性を否定することは許されないのである。

続いて肝臓について、村瀬決定は外側からは6個で内側からは3個検出されているから汚染の可能性を否定できないとするが、これは完全に測定誤差の範囲にすぎず、このような検査上の誤差として無視できる些細な個数の違いを理由に検査結果全体の信用性を否定することは許されないとA意見は批判する。また、肺の気管支と同様、肝臓内の動脈も内側ほど太いので外側のほうが多く検出されることはむしろ当然であるから、やはり信用性を否定する根拠とはなりえない。

さらに腎臓について、村瀬決定は腎臓にコンタミネーションが生じていた以上ほかの臓器にも生じていた可能性を否定できないとするが、腎臓は他の臓器とは全く異なる状態であったことを無視するものであると指摘する。実際、A鑑定に記載されているとおり、腎臓は南雲鑑定の残りかすのような形状であり、すべて合わせてもわずか2gしか残存しておらず、トリミングすらできなかったのである。また、A鑑定に記載されているとおり、洗浄はわずかに圧をかけつつ蒸留水をかけて流す工程にすぎないから、外部に付着するすべての珪藻を流しとることはできない。仮にすべてを流しとれるような強い圧の蒸留水を、残りかすのような形状の臓器に噴射すれば、臓器そのものがバラバラになってしまい、むしろコンタミネーションは進むことになってしまうのである。

A教授は、肉眼で試料を確認した当初から以上の懸念を抱いていたため、そもそも腎臓を検査の対象とすることは不可能であると指摘していた（同尋問調書10頁）。それを無理に鑑定資料として加えたのは裁判所である。その経緯を無視して、腎臓の検査結果を他の臓器に類推するのはあまりに理不尽である。

さらに、村瀬決定は、洗浄してもコンタミネーションが除去されなかったのはそれが内部にまで及んでいたからではないかと疑問を呈するが、前述のとおり内部に珪藻が侵入することは原理的にあり得ない。今回の腎臓のように残りかすのような形状の集まりであれば外部も内部もないからコンタミネーションが全体に広がる可能性もありうるが、心臓、肝臓、肺はある程度のまとまりとして保存されており、いずれもトリミングをしたうえで珪藻検査を実施しているのであるから、腎臓とは全く条件が異なる。

以上のようにコンタミネーションが鑑定の信用性に及ぼす影響は無視できるにもかかわらず、A教授は念には念を入れて各検査結果についてコンタミネーションの可能性がありえないかを検証し、いずれもあり得ないとして鑑定結果に至っているのである。

A意見書の2つ目の項目は、肺に関する村瀬決定の理由づけに対する反論である（「2．「イ　肺から検出された珪藻類について」に対する意見」）。

まず、村瀬決定は死後肺内の珪藻が増殖した可能性を指摘するが、そもそもA教授は肺内の珪藻数に重きを置いていない。そしてたとえ肺内で珪藻が増殖したとしても大循環系の臓器まで移動することはない。

次に肺内の胸腔内液体貯留について、村瀬決定は溺死以外でも貯留が生じる可能性があることをA鑑定書の信用性を否定する理由とするが、A意見書で述べられているとおり、胸腔内貯留はあくまで総合判断の一要素である。そして溺死の際に胸腔内貯留が生じることは争いがないのであるから、A教授が溺死の結論を導く理由づけの一つとして用いたことを批判するのは論理的におかしなことである。

A意見書の3つ目の項目は、大循環系の臓器から検出された珪藻の個数に関するものである。村瀬決定は、いずれも数個ずつという少数にとどまるからコンタミネーションの可能性を否定できないとするが、A意見書が指摘するとおり、まさに少数の珪藻が大循環系から検出されることが溺死の証拠であるとして、過去数十年の溺死鑑定は実施されてきたのである。少数であることだけでコンタミネーションの理由とすることはできない。そして、A鑑定は、蒸留水で洗い、トリミングを施した臓器の内側から、長さが比較的短く、肺から検出された珪藻と同属の珪藻が見つかっていることを理由に、コンタミネーションの可能性は排除できるとしているのである。A意見書は、村瀬決定がこの判断過程については一切触れずに、A鑑定が検査手法においてはコンタミネーションが生じないよう配慮し、判断過程においてもコンタミネーションの可能性を極力排除して鑑定結果を導いたことを逆手にとって、コンタミネーションの可能性を否定できないとすることは、およそ許されないと指摘する。

A意見書の4項目は、村瀬決定が薬毒物中毒の可能性に触れた点に関するものである（「4．「薬毒物中毒」の可能性について」）。村瀬決定は、肺にみられる胸腔内液体貯留について薬毒物中毒の可能性を指摘するが、A意見書が指摘するとおり、薬毒物中毒を死因と診断するのであれば、致死量以上とみられる血中濃度で薬毒物が検出されたり、肝臓などの臓器に薬物の影響がみられることが必要である。しかし、検死解剖を含めて、薬毒物の根拠となる所見は皆無である。

他方で、この点は村瀬決定の全体に関わる指摘として大変重要な点であるが、A意見が指摘するとおり、仮に溺死でなく薬毒物が死因なのであれば、解剖所見やA鑑定所見の中に、明かに溺死でないといえる所見があるはずなのである。しかしそのような所見は一つもない。村瀬決定は、溺死であることと矛盾する可能性を一つも指摘せずに、溺死でないとしても矛盾しない可能性のみを指摘して、A鑑定の信用性を全面的に否定したのである。このことはコンタミネーションについてもいえる。村瀬決定は、心臓、肝臓、肺の内側の検査結果について、明らかにコンタミネーションであるといえるものは一つも指摘できていない。ただ、コンタミネーションでないことを立証できていないとして、その信用性を全面的に否定するのである。これは請求人が無罪であることを合理的な疑いを超えて立証しなければ再審を開始しないと言っているに等しい。立証責任が完全に入れ替わってしまっている。

以上のとおり、A意見書は、A鑑定書の信用性を否定する村瀬決定の理由づけがいずれも誤りであることを指摘するものである。

# ５　A意見書は無罪を言い渡すべき明らかな証拠である

## (1) 新規性

A意見書は、第一次再審請求審の特別抗告審において提出したものであるが、このような証拠についても「新規性」の要件を満たすことは上記の高松高決の趣旨からして明らかである。

## (2) 明白性

A意見書は、A鑑定に対する村瀬決定の理由づけに対し、逐一専門家の知見に基づき反論するものである。A意見書はそれ自体の結論として佐藤氏の死因は溺死であると判断しているから明白性を有する。

なお、A意見書において縷々述べられているとおり、村瀬決定は、A鑑定がコンタミネーションの可能性を払しょくできないことを理由にその信用性を否定するが、再審においても請求人・弁護人に求められる立証の程度は合理的な疑いをさしはさむもので足りるのであるから（白鳥決定）、コンタミネーションの可能性が抽象的に残るとしても、全体として溺死であることの合理的な疑いを差しはさむものであれば証拠としての明白性は認められる。そしてA意見書がA鑑定書とあいまって、その疑いを提起するものであることは明らかである。

Ⅴ　アナリエ供述調書など（証拠番号６，７）

　確定第一審判決は、武まゆみ、森田考子、アナリエの3名の証言について、基本的な筋道においてよく合致していることに加えて、本件の骨格をなすとみられる重要な場面における一見極めて些細と思われる部分においても、相互によく符合していることをあげて、信用できると結論づけた。そして、相互に符合していることを本事件の最も中心的な証拠である武証言が信用できる根拠とした。

　ところが、アナリエは懲役15年の刑を終えて出所後、これら法廷でした証言はすべて検事が考えた内容であったことを告白し、自らも再審請求をするに至った。

このアナリエの供述を記録した供述調書は、新規性が認められ、また武の証言を基礎として犯罪事実（渡辺荘事件、風邪薬事件双方）を認定した確定審の認定に合理的な疑問を投げかけるものであり明白性も認められるので、無罪を言い渡すべき明らかな証拠（刑事訴訟法435条6号）である。

# １　確定第一審判決の認定

　確定第一審判決は、アナリエの証言と、武・森田の証言が付合していること等を理由に、トリカブト殺人を認定した。確定第一審判決に現れたアナリエ供述の位置付けは、次のとおりである。

確定第一審判決70頁より

「武まゆみ、森田考子、アナリエ・サトウ・カワムラの3名の女性が、捜査段階の取調べにおいて、紆余曲折はあるものの最終的にはいずれも被告人とともに本件犯行を犯したことを自供し、各人それぞれの公判廷においても基本的にその供述を維持した結果、3名ともすでに有罪判決を受けて、その刑が確定していることが認められるところ、この3名、殊に武の当公判廷における証言内容は、その一部に記憶が定かでない部分や曖昧な部分があるとはいえ、全体としてみれば、長い年月を経た以前の出来事であるにもかかわらず、極めて具体的且つ詳細で、迫真性に富んでおり、死亡した佐藤修一の臓器からトリカブト毒が検出された旨の鑑定結果や、武がトリカブトの採取場所として特定した美濃戸抗原別荘地において現実にトリカブトが自生することが確認されたことなど、証言を裏付ける客観的な事実が存在するのである。さらに、これら3名の証言する内容は、基本的な筋道においてよく合致しているばかりか、例えば、次のように、本件の骨格をなすとみられる重要な場面における一見極めて些細と思われる部分においても、相互によく付合している。すなわち、」

1として、(71頁)

平成7年6月1日、請求人の別荘で、佐藤殺害についての謀議を行った、3名全員が、①被告人がアナリエに対し、佐藤の手術痕の位置を説明してこれを覚えておく必要があると発言した旨、「通常人が容易に思いつくような発想ではなく、このような面において被告人がいかに奸智に長けた用意周到な人物であるかを示す特徴的な出来事ということができ」

2として、（71頁）

佐藤がトリカブト入りのあんパンを食べさせられた後、嘔吐する気配を示した際、「武は、被告人から洗面器を持ってくるよう指示されたアナリエが、洗面器の意味が分からず、もたもたして何か違うものを持ってきたような記憶がある旨証言しているところ、アナリエも、『八木から『何とかメンキ』持って来てと言われたが、意味が分からず、バスタオルを持っていったところ、八木から『それじゃねえんだよ。』と怒られた』旨証言している。殺害実行の緊迫した場面において、洗面器の意味が分からず、指示と異なるもの（バスタオル）を持参したなどというのは極めて特徴的な出来事であって、このようなことを体験してもいないのに証言するということはおよそ考えられないことといえる。」

「さらに、佐藤が動かなくなった後、被告人と武が渡辺荘を立ち去る際、アナリエが動いたらどうするのかと尋ねたのに対し、被告人が、『死んでいる人間は怖くない、生きている人間の方がよっぽど怖い』旨の発言をしたという点についても、武とアナリエは一致して証言しているところ、この発言も極めて特徴的なものであって、空想の産物であるとは到底考え難い。」

3として佐藤の死体を利根川に遺棄した状況について、（71から72頁）

「武とアナリエは、その際、アナリエが河原でつまずいたことや、利根川の川岸で佐藤の死体を被告人と武が長い棒（モップ）でついて流したことを一致して証言しているところ、さらに、森田も、被告人らが戻ってきた後、アナリエがカウンターの中の椅子に座って足を拭きながら、『ターちゃん、足濡れちゃったからサンダル貸して。』と言ったことや、武がモップで佐藤の死体を突っついたら流れていった旨発言したとして、これと合致する証言をしている。これらも、それなりに特徴的な出来事であって、3名が3名とも、全く経験していないことを創作で証言したなどとは到底考えられない。」

「第四　アナリエ証言の信用性」の「三　供述の変遷」第3項（122頁）

佐藤の死体に衣服を着せた点について、着せる順序等が捜査段階における供述と変わっている点は、武証言の内容を知って矛盾に気づいたからであり、信用できないという弁護人の主張に対し、

「仮にアナリエが明確に記憶にない事項について他の者の供述に適当に合わせてその場を逃れようとする人物であれば、捜査官はそれを利用して、捜査段階から武証言と一致する供述を得ることも可能であったであろうが、実際にはそのような結果にはなっていないということは、アナリエが不正確ながらも一応自己の記憶に従って供述、証言していることの証左というべきである。」

　このように第一審判決は、武とアナリエの証言について、細かなエピソードが一致している部分を殊更とらえて、それが「空想の産物であるとは到底考え難い」であるとか「体験してもいないのに証言するということはおよそ考えられない」などと評価した。そこには、彼女たちが法廷で証言するに至るまでの間、検事が彼女たちにどのように働きかけたのかという点の考察が全く抜け落ちており、法廷での証言は彼女たちの生の記憶のみに基づいて行われているという無謬主義に裁判官が陥っていたことが読み取れる。

# ２．アナリエの新供述の内容

　アナリエは15年間の服役を終え、真実を語った。その内容が2015年8月26日付け供述調書（以下、「アナリエ新供述調書①」という。新証拠6）、2016年4月6日付け供述調書（以下、「アナリエ新供述調書②」という。新証拠7）である。

　まず、アナリエ新供述調書①は、アナリエが服役を終えて出所した後、東京入国管理局に収容されているときに、請求人八木茂の弁護人がアナリエと面会し作成したものである。その内容は以下のとおりである。

私は誰も殺していないし、殺そうとしたこともありません。

トリカブトなど見たこともないし、「トリカブト」という言葉も、検事からの取調べで初めて聞きました。検事から最初に聞いた時、日本語の不自由だった私は「鳥」のことだと勘違いしたほどです。裁判の中で、佐藤さんに毒入りのパンを食べさせたことなどを話しましたが、本当は、そんな事実はありません。

それから、私は風邪薬のことも全く知りません。川村さんや関さんに風邪薬を飲ませて殺そうとしたことなどありません。

保険金をもらって使ったこともありません。

何度も何度も検事に本当のことを話したのに、検事は全く信じてくれませんでした。私は、「自分の言う通りのことを話せば刑が軽くなる」という検事の言葉を信じて、検事の言いなりになってしまったのです。今は、法廷で嘘を話してしまったことをとても後悔しています。

　そして、裁判で真実を証言しなかった理由については、

私の担当の検事は、星検事という女性の検事でした。

星検事から事件のことを聞かれましたが、本当に何も知りませんでしたし、分かりませんでした。だから、分からないことには分かりませんと答えて、知っていることには本当のことを答えていました。真実のままをタガログ語で書いた上申書も出しました。でも、星検事は「分かりませんなんて誰も信じてくれない。あなたは頭の回転が速くて作り話がうまい。」と言って、私の言うことを一切何も信じてくれませんでした。私は悔しくて悔しくて今でも星検事を恨んでいます。

取調べは、夜中の午前1時とか2時まで続くこともありました。星検事からはそれが当たり前だと言われました。

裁判が始まってからも、松山弁護士からの反対尋問が始まってからも、星検事からの取調べは続きました。その日の法廷が終わってから、星検事から毎日取調べを受けたのです。メモを見せられて、証言の練習をさせられました。あなたは、違うことを言っちゃいそうだからと言われました。

当時の私は、まともにご飯も食べられず、点滴がごはん代わりでした。頭痛がするため病院に行った時も、星検事は病院にまで押しかけてきて、ぐったりしている私の横で取調べをしたのです。

もちろん私には弁護人がついていました。最初否認していた私が供述を変えたため、弁護人だった横山弁護士には、「なぜ供述を変えたのか？真実を話すように。」と言われました。でも、その時の私は、星検事から、「分からないと嘘を言って否認していたら刑務所から一生出られなくなる。大変な事件を起こしておいて分からないと言わないで。私の言うとおりのことを裁判で話せば、刑務所から早く出てくることができる。私の言うとおりにすれば、判決で出される刑の70％か80％でフィリピンに帰れる。」と、繰り返し、繰り返し言われていたので、本当のことを言う勇気がありませんでした。

当時の私は、星検事の望むような嘘を言って早く刑務所から出てくることしか考えられませんでした。今はそのことをとても後悔しています。

1審で求刑どおりの懲役15年の判決が出た後、私は控訴をしました。しかし、その後星検事がまた私に会いに来て、控訴を取り下げるように言いました。星検事に逆らうことができなくなっていた私は、控訴を取り下げたのです。

この15年間刑務所にいた間にも、星検事の存在に苦しめられてきました。星検事は、刑務所に行く前に私に面会に来ました。そして、「誰から手紙が来たか、誰と面会したか全部分かるから。」と私に言いました。私が本当のことを手紙に書いたり、面会で話したりすれば、もっとひどいことされると思いました。だから刑務所の中でも本当のことを話せませんでした。

というものである。

　そして、渡辺荘事件があったとされる平成7年6月3日の出来事についての供述は以下のとおりである。

この日は、私が佐藤さんに毒入りパンを食べさせて殺して、利根川に死体を運んだことになっている日です。

でも真実は違います。本当は何があったか、今覚えていることは次のとおりです。

この日の朝は渡辺アパートにいました。武がマジェスタで迎えに来て、一緒にアピタというデパートに、ディナーショーで履く靴を買いに行きました。アピタには適当な靴がなく、結局、本庄警察の近くの靴屋で買い、一度アパートに戻りました。星検事には戻っていないはずだと決めつけられていたけれど、実際は戻りました。

武には「またあとで」と言われて、武と別れました。

その後、午後3時か4時頃、フィリピン人の友達の入江エレナさんが自転車でアパートに遊びに来ました。彼女が休みの日はいつも一緒に自転車の練習をしてブラブラしていたのです。この日もエレナさんは休みだったので、一緒に自転車で遊びました。エレナさんは、日本人と結婚して、夫婦で本庄駅前の南大通りで居酒屋をやっていた人です。

午後5時過ぎころ、エレナさんと別れて自宅に帰って、佐藤さんのご飯を作りました。さんまの塩焼きでした。佐藤さんにはいつもご飯を作ってあげていました。この日はディナーショーに行く予定だったので、早めに作っておいたのです。

夕方、武が迎えに来たので、武の運転するマジェスタで八木の家に行きました。武が来た時、まだ佐藤さんは帰ってきていませんでした。

その後、八木を乗せてサンパレスのディナーショーに向かいました。サンパレスには大勢の客がいました。開演時間前に着いたかは覚えていません。ごはんと歌と、どっちが先だったかも覚えていません。

ディナーショーが終わってから、みんなでレオに行きました。レオは午前2時か3時に終わって、それから八木に秩父の別荘に行くと言われました。八木には、佐藤さんが渡辺アパートにいるか電話してと言われたので、電話しました。ところが佐藤さんが電話に出ませんでした。そこで八木に言われて渡辺アパートに行って確認しましたが、佐藤さんはいませんでした。私はレオに行って「いない」と伝えると、八木は「分かった」と言いました。その後レオからみんなで八木の車で別荘に行きました。

佐藤さんを殺していないし、遺体を運んだなどということもありません。

　次に、アナリエ新供述調書②は、アナリエがフィリピンに帰国した後に、自らの再審請求のために自らの弁護人に供述した内容が記録されているものである。その主な内容は以下のとおりである。

　八木さんから，佐藤さんを殺害するために，佐藤さんにお酒をいっぱい飲ませろというような指示を受けたこともありません。たしかに，佐藤さんにお酒をたくさん飲ませたことはあります。でも，それは佐藤さんが私の働くスナックのお客さんだからでした。店員として当たり前のことです。お酒を飲んでくれれば飲んでくれるほど，利益が出るからです。

　佐藤さんが「レオ」で飲んで寝てしまった時に，私が佐藤さんを足で蹴ったり，髪をひっぱったりして，無理やり起こしたようなことはありません。お店で佐藤さんが寝てしまった時に，肩をたたくなどして起こしたということはあります。それは，寝られたらお店として困るからです。無理にお酒を飲ませるためにそのようなことをしていたのではありません。

　私が，佐藤さんを，わざわざ家まで迎えに行って「レオ」に連れて行ったり，「赤ちょうちん」まで迎えに行ったりするということもありません。そもそも，佐藤さんは，武さんのお客さんです。私が接待をするべきお客さんではないのです。

　私が，佐藤さんに，焼酎とウイスキーを混ぜて飲ませるというようなこともありません。

　また，武さんがコーヒーにお酒を混ぜて飲ませたかどうかというのは，知りません。たしかに，コーヒーは佐藤さんのテーブルに置いてあったことがあります。でも，この中になにかお酒など混ぜものをしていることは知りませんでした。

　私は，自分の裁判で，私が佐藤さんの殺害計画から抜けられない理由として，八木さんから１００万円の小切手をもらったからだという話をしています。１００万円の小切手をもらったことは事実ですが，佐藤さんの関係かどうかというのは全く知りません。そして，その１００万円の小切手も，すぐに八木さんから取り上げられました。

　今までにお話した通り，佐藤さんに対する保険金殺人計画を，私が八木さんや武さんから聞かされたことは，一切ありません。当然，自分が計画の実行に加担したということもありません。これが真実です。

佐藤氏が死亡する前の経過についての供述は以下のとおりである。

　裁判では，佐藤さんに，武まゆみがトリカブト入りのパンやまんじゅうなどを食べさせせて殺害したという話をしました。

　たしかに，私は，佐藤さんが，普段パンやまんじゅう，あるいは大福を食べているのを見たことはあります。しかし，それらが，武さんから渡されたものなのか，どこから持ってきたものなのか，私は見たこともありませんし，聞いたこともなかったので，知りませんでした。

　佐藤さんが，私にまんじゅうをくれたこともありました。佐藤さんからもらったまんじゅうや大福の皮を食べたこともあります。皮しか食べなかったのはあんこが嫌いだからです。しかし，もしその中に毒が入っていたのなら，絶対に食べることなどしません。そのまんじゅうや大福に触ることもしないと思います。

　佐藤さんの唇がたらこのように腫れ上がっていた，だとか，下痢をしていたから八木さんがおしりをふいた，だとか，そういう話もありました。しかし，それは事実ではありません。少なくとも，私は知りません。佐藤さんが，手が痺れると言っていた，という話もありました。佐藤さんがそう言っていたことは，たしかにありますし，私も聞いたことがあります。しかし，その理由は全然わかりませんでした。

　佐藤さんと鬼怒川旅行へいったことがあります。一緒に行ったメンバーには，八木さん，武さん，森田さんも居ましたし，佐藤さんも居ました。裁判では，この旅行の２日目に，佐藤さんは苦しんでいる様子だった，おかしな様子だったということ，それを私も知っていたということになってしまいました。しかし，佐藤さんが苦しんでいるような様子など全く見ていません。佐藤さんが倒れたということは，後から聞いたのです。私はその時は寝ていて見ていません。八木さんや武さんから，後から「佐藤さんが倒れた時，あんたは寝ていたんだよ。」と怒られたことを記憶しています。

　そして，東秩父の別荘で殺害計画を話し合ったという話があります。これは違います。東秩父の別荘などしょっちゅう行きます。たまにはゆっくり温泉に入りに行こう，という感じで，いつものように行っただけです。佐藤さんを殺すなどという話は，私は一切聞いていません。

渡辺荘事件当日の出来事についての供述は以下のとおりである。

　裁判では，事件があった日，私が，トリカブト入りのあんぱんを食べさせた場に一緒に居たという話をしました。私が佐藤さんを押さえつけたという話もしました。

　しかし，本当は，私はその場にいませんでした。そのような話を聞いたこともありませんでした。

　当日，武さんとニチイに行ったという記憶もありません。その日はたしか，昼間は「エリエ」という友達と一緒に居たと思います。エリエはフィリピン人です。よく，聖也の面倒を見てくれた友達です。私は，そのことを自分の日記に書きました。私はこの日記を返して欲しいと何度も言いましたが，未だに検察官からは返してもらえません。この日の日記に，私が無実である証拠が書いてあるのです。

　６月３日の夜にディナーショーに行ったのは事実です。その後レオに寄って，その後別荘へ行きました。別荘へ行く前には，渡辺荘にも寄りました。別荘に行くので，自分の荷物を取りに行ったのです。渡辺荘に行く前，八木さんの指示で，佐藤さんに電話しました。でも電話に出ませんでした。渡辺荘へ荷物をとりに行った時，佐藤さんはいませんでした。部屋は普通で，荒れていたということもありません。そのことを八木さんに伝え，もう一度八木さんと渡辺荘に行ったのですが，やはり佐藤さんは居ませんでした。八木さんから「何か聞いていないか」と聞かれました。私は佐藤さんがどこにいるか知りませんでしたので，「わかりません」と答えたのを覚えています。

風邪薬事件についての供述は以下のとおりである。

　まず，２人にお酒をたくさん飲ませたということは間違いありません。ただ，佐藤さんと同様，それはお客さんだから，当然のことです。具合を悪くさせるためとか，殺害するために，飲ませたということはありません。わざとアルコール度数が３５度のお酒を飲ませたという話もありますが，それも，二人が希望したからそのような強いお酒を飲ませていただけです。アルコール度数が３５度の焼酎は，何も川村さん達だけに飲ませていたわけではなく，他のお客さんにも提供していました。また，八木さんからは，お店のお客さんにはお酒を飲ませろと言われたことはありますが，お店の売上げのためだと思っていました。川村さんや森田さんに対してだけ言われていたわけではありません。一気飲みゲームをしたこともあります。たとえば，じゃんけんをして，負けた人が一気するゲームなどをしたことがあります。でも，それは何も死なせようと無理して飲ませるためにやっていたわけではありません。ただゲームをすれば，面白がってお酒をたくさんのんでくれるので，売上になるからしていたのです。ちなみに，負ければ当然私だって飲みます。これは，私だけの話ではありません。川村さんは武さんのお客さん，森田さんは森田考子さんのお客さんでしたが，すごい量のお酒を飲ませていたということを見たことはありません。私が，水差しに焼酎を入れたということもありません。

　また，「すのくすり」というのも，私は何なのか知りませんでした。見たこともありません。川村さんから聞いたこともないのです。

　川村さんに覚せい剤を飲ませたことはありません。川村さんが覚せい剤を使っていたことも知りません。これも星検事に無理矢理認めさせられたエピソードなのです。

　そして，森田さんが亡くなった時のことについてお話しします。私が森田さんを家に連れて帰った時に亡くなってしまったは本当です。私が車を運転している時に亡くなってしまったのです。その時は，私も森田さんもマネキンからの帰り道でした。八木さんが私に，森田さんを送ってと言ったので森田さんを送ったのです。車の中で，気づいたら，森田さんは動かなくなっていました。この時は，まさか亡くなっているとは思いませんでした。八木さんに電話し，「森田さんが動かない」と言いました。そしたら，八木さんと，川村さんが来たのです。八木さんが「死んじゃった」と言ったのです。それを聞いて，私もびっくりしました。

# ３．新規性および明白性

　これらのアナリエ新供述調書が新規性を満たすことは明らかである。

　次に、明白性について述べる。上記のとおり確定判決はアナリエの証言を武の証言が信用できる大きな根拠と位置づけた。アナリエ証言について「極めて具体的かつ詳細で、迫真性に富んでいる」などと評価したが、これが誤りであることがアナリエ新供述証拠から明らかとなった。アナリエ新供述証拠によれば、確定判決が極めて具体的であるとか迫真性に富んでいる、あるいは、「このようなことを体験してもいないのに証言するということはおよそ考えられない」などと評価した供述はすべて星検事の作文であった。武まゆみの取り調べも担当していた星検事がアナリエの証言内容を創れば、具体性、迫真性を帯びているかのような証言を創り出し、事実を体験していない人にあたかも体験したかのように証言させることは極めて容易なことである。このような検事の手によって創作された証言によって裁判所は判断を誤ったということである。

そして、星検事がアナリエに対してこのような脅迫や偽計などを用いて証言を作出していた事実は、翻って、武の証言が信用できないことをも示している。武の証言が信用できないこともまた確定第一審以来、本訴訟の最大のテーマの一つとして主張し続けてきたが、アナリエ新供述によってその信用性は崩れたと言うべきである。

Ⅵ　おわりに

　死刑判決の最大の証拠は武まゆみの証言である。この武証言は異常とも言える変遷の過程を辿ったものであったが、それを支えたいくつかの柱があった。その一つが森田考子、アナリエの証言であり、その一つが渡辺荘事件、風邪薬事件における「科学的」証拠である。

　ところが、アナリエの証言はアナリエ新供述によって崩れ去った。さらに、渡辺荘事件における佐藤氏の死因についての「科学的」証拠は、A鑑定によって崩れ去った。そして、風邪薬事件における「科学的」証拠もまた、逸見意見書によって科学的に論駁された。

　もはや、武まゆみの証言を支えるものは何もなくなった。残されたのは、特異な変遷を辿った武まゆみの証言のみである。全ての支えを失った武証言によって、死刑という究極の刑罰が科されることは正義に反する。

　速やかに再審開始決定が下されるべきである。

以　上

＜添付資料＞

１．確定判決写し（判決謄本は追完予定）

２．各新証拠

３．弁護人選任届

1. なお、好中球と単核細胞との比率といいながら、実際の計測を好中球とリンパ球の比率とした理由は不明である。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 矢田：好中球に異常がなければ、常在菌による肺炎・胸膜炎によることはない。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 北村：ストレプトコッカスインターミディアスのような弱いのはホスト側に何らかの弱い点がなければ排除される。好中球の関与が強く推定される。 [↑](#footnote-ref-3)
4. Diatom Test - Past, Presence, and Future: A Brief Review http://www.ijrrms.com/pdf/2012/jul-sep-12-pdf/08.pdf [↑](#footnote-ref-4)